
仮面ライダーNEW電王×リリカルなのは Strikers + strikeform

ファンタム

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーニュ電王×リリカルなのは

Strikers

+ strikeform

【Zコード】

N87070

【作者名】

ファンタム

【あらすじ】

野上幸太郎が魔法世界へイマジンを追つてきた。
彼がそこで見たものは・・・!?

プロローグ（前書き）

初めてのううなので誤字などがありたり駄文と呼ぶにふさわしい物になってしまふかも知れませんががんばります。

プロローグ

『時の列車デンライナー、次の駅は過去か？未来か？』

野上幸太郎とその相棒テディの問題が解決して1ヶ月……
幸太郎は今の自分の自分の状況を確認するために、昨日から現在に至るまでのことを思い出していた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

始まりは昨日のこと、幸太郎は突然オーナーに呼び出され、相棒のテディと共にターミナルへむかった。

「別の世界？」

「ええ、『A · R · WORL D』とは似て非なる世界 とでも言いましょうか。」

幸太郎は正直訳がわからなかつたがとりあえず話を進めることにした
「で、俺はその世界に行けばいいんだな。」

「幸太郎君は話が早くて助かりますねえ。」

「で、じいちゃん達は？」

じいちゃんとは幸太郎の祖父こと野上良太郎のことである。
わざわざ自分に頼らなくとも電王はすでにいるのだ。

「良太郎君たちには別件でうごいてもらっています。」

「ふうん、つまり俺はその世界に紛れ込んだイマジン探しばいいんだな。」

「ええ、では頼みましたよ。」

・・・・・・・・・・・・・

しかし今自分はあきらかにイマジンより妙なものを見ている・・・
「何で人が空飛んでんだよ・・・」

プロローグ（後書き）

幸太郎「幸太郎と
テディ「テディの」

2人「次回予告」「ナーナー」

泣いた青鬼「どうも、今回一言も話すことのなかつたテディです・・・
・」

幸太郎「いや、安心しろテディ次はちゃんとセリフがあるからな!
！」

幸太郎「そんなわけで、次回はテディのセリフと『あの人』が登場。

「?
?
?
?「俺、参上!-!」

幸太郎「おまえじやないつて・・・・」

別世界の戦い

「テテイ、セツキの見たか?」

「ああ、あれは跳力にものではなくまさしく飛行だった!」

「なんか、よく分かんないけど とにかくイマジンの情報を集めに行こう。」

冷静を装つてもやはり幸太郎も驚きを隠しきれいとはできなかつた

「幸い！」は人が多いようだ、誰かに話を聞いてみよ。

しかしテテイの提案を拒否するかのように

「ドオオオン……」

巨大な爆発音が鳴り響いた。

「なんだ今の一？テテイ行くぞー！」

「応！」

一方その一方・・・

「避ひん！早く避難してください急いでーー！」

オレンジ色の髪をツインテールにしている少女が市民に避難を促し

ていた

「よし、民間の人は避難したわね、行くわよスバル！！」

「OK!! テイア」

青い髪のボーイッシュな少女が加わり戦闘が始まる

だが少女たちは機械兵『ガジェット』相手に苦戦してしまつ・
敵の数が多くすぎるのだ

「（グウ・・・私はこんなところでやられるわけにはいかない・・・
）」

その時・・・

「行け！！テイア」

幸太郎の合図とともにテイアはNEW電王の武器『マチュー・テイア』
となりガジェットの一体に体当たりする

「「えーーー」」

驚いたのは2人の少女だ突然やつてきた謎の男と青鬼がガジェット
の一体を吹っ飛ばしたのだから無理もない

「ちょっとーそこの人危ないから逃げてくださいーーー」

ティアが幸太郎に強い口調で言つ
しかし幸太郎は・・・

「べつに逃げる必要ないからいいの。」

そして幸太郎がライダー・バスを手にすると彼の腰に金色と黒色で装飾された

『NEWデンオウベルト』が現れる

ミコージックホーンが流れ彼は自らを戦士に変えるための言葉を唱へ

「変身」

「Strike! or...」

鋭角的な電仮面や全身を走るテンレール

胸のターンテーブルなどが特徴の

幸太郎のオーラをフリー・エネルギーに変換して変身する戦士

仮面ライダーNEW電王へと彼の姿は変わる

「カウントは?」

マチュー・ティの持ち手のすぐ上の部分にあるティの顔が聞く

「とりあえずあの娘達の周りにいるの全部まとめて15...いや1
3でいいや

別世界の戦い（後書き）

幸太郎「幸太郎と
テディ「テディの」

2人「次回予告」「ナー」

幸太郎「なんで俺がわざわざ別世界に来なくちゃいけないんだよこの
うゆうのはティケイドの仕事だろ・・・」

テディ「私としては認知度が上がるからうれしいんだが」

幸太郎「でもキャラが増えたらこのコーナー乗つ取られるかも
しれないぞ。」

テディ「何！？では今すぐ次回登場のこの世界の主人公に話をつけ
なくては！」

幸太郎「むしろ読者の皆様の方だろ。」

テディ「皆様・・どうか・・どうか・・私の出番をこれ以上とらな
いで下さいませ！」

幸太郎「そんなわけで次回は主人公登場」

？？？「こんどこそ、俺、さんじょ「違う」つ！？」

「3」

「ハアツ！」

「2」

カウントが2になると同時に幸太郎はライダーパスをNEWデンオウベルトにあてる

『Full Charge』

マチョー テ テイにエネルギーが溜まつていいく NEW電王の必殺技マチョー テ テイで敵を切り裂く「カウンタースラッシュ」を使うためである

「1」

「ハアアアアアーー！」

「0」

カウント0と同時にガジェットが爆発していく

「さて、これで終わりっと。」

「す、すゞ」・・・

スバルが呆然としながら言いつ

「あなた、一体何なんですか！？」

「ティアナが怒氣すら含まれているようにも聞こえる声で問う
「見てわからない？」ていつか人に正体聞くときはまず自分からでし
よ。」

「そうね、私は時空管理局機動六課スター・ズ4のティアナ・ランス
ターです（怒）」

あきらかに小バカにしている幸太郎の態度に不機嫌のようだ

「同じく、時空管理局機動六課スター・ズ3のスバル・ナカジマです
！」

こつちは特に気にした様子もない

「時空管理局？ ティアナ知ってるか？」

「いや、聞いていない。」

マチュー・ティアナから元の姿に戻るティアナ
幸太郎も同じく変身を解く

「時空管理局を知らない！？それにさつきの姿・・・ティアナもしか
してこの人」

「次元漂流者かもしけないわね・・・」

「その次元漂流者つてのが何かは知らないけど、俺たちはイマジン追ってきたんだ。」

「いまじん？」

「もうだ、あんた達こいつに似てる化け物知らない？」

そうこつてテディの肩に手を置く幸太郎

「ば、化け物」

若干傷ついたようだ

幸太郎とティーディーはその後自分たちのこと、イマジンのことアバウトに説明した

「私たちは知らないけど、機動六課にいけば何かわかるかも」

ティアナが続けて言う

「それに私たちにはあなたを保護する義務があるから一緒に来てもらいます」

「どうするティーディー？」

「私たちはこの世界について何も知らないしいいんじやないか」

「まあ、お前がそう言つなさい」

・ ·

ヘリコプターに乗った幸太郎達に

「はじめまして、時空管理局機動六課スターZの高町なのはです、先ほどは私の部下を助けていただきありがとうございました。」

と話しかけてくる女性がいた

さつきまでスバルたちと何か話していた茶髪のサイドポニーの人だ

「俺は野上幸太郎、こいつは相棒のテ'ティイ」

「はじめまして、テ'ティイです。」

テ'ティイが敬礼する

そして一同を乗せたヘリは機動六課へと向かっていく

魔王と魔導師（後書き）

なのは「なのはと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「——」

幸太郎「俺は！？」

なのは「にやはは・・・テディちゃんには見せ場があつてほし—
て声があつたけど幸太郎君にはなかつたから・・・」
テディ「すまない、幸太郎今まで世話になつた。」

幸太郎「ここでそれを言つか！！」

なのは「さて次回は私の幼馴染達が出てきます、ではさよなら～。

」

幸太郎「困るんだよね！俺の扱いこんななんっちゃつて！！」

運命の出会い

機動六課に着いた幸太郎たちは早速部隊長室に呼ばれた

しかし、幸太郎が自動ドアを通り部屋の中に入ろうとした瞬間・・・

「がつ！」

自動ドアが閉まり幸太郎が挟まれる
そして半ば無理やりドアを開けに入る

「幸太郎大丈夫か！？」

テディがあせりながら聞く

「別にこんなのお前が来るまで日常茶飯事だつたろ？」

なにか言おうとしていた目の前の人達は全員ポカンとしているいきなり強烈過ぎるもの（不幸）を見せてしまったようだ

「つややろ・・今まで一回も壊れたことないのに」

「しかもさつき私が来た時はなんともなかつたよ・・」

「で、あんたたちは？」

「あ、時空管理局機動六課部隊長の八神はやてです。」

「私は時空管理局機動六課ライトイ・シングルのフェイト・T・ハラオ

ウンです。」

「私はライトニング2のシグナムだ。」

「あたしはスターズ2のヴィータだ。」

「私はリィンフォース？ですー。」

「何だコイツ、イマジンか！？」

「違います、私ははやてちゃんのユーヴィンテバイスです！――

「機動六課ライトニング3のヒロオ・モンティアルです。」

「私はライトニング4のキャロ・ル・ルシエです、でこの子はフレードリヒです。」

各自自己紹介が終わる

そして幸太郎が自分のことを話す番が来た

「まず俺は野上幸太郎、でここつは

「テディイです。」

「テディイがお辞儀しながら言つ

「单刀直入に言つと俺たちは別世界から来た、ってわけ。」

「て、ことねやつぱり次元漂流者なのかな？」

「いや、さつきへりでその次元漂流者ってのは聞いたけど違う。俺たちは自分の意思でこの世界に来たんだ。」

「なんでもまたわざわざそないなこと?」

はやてが問う

「俺たちはイマジンを追つてきたんだ。」

「さっきも言つてたけどそのイマジンで何なんですか?」

こんどはスバルが問う

「簡単に言えば未来からの侵略者で時の運行を乱すやつらかな。」

「「「「「「「...侵略者」「「「「「「」」」」」」」

「全員ハモつたな」

「て、そんなのんきなこと言つたらんで、くわしく説明してーなー!」

「テディイ

「(あ、人任せにした。)」

全員の共通意識であった

「人間のイメージにより怪人としての肉体を得てイメージした人間と契約しその人間の願いをかなえることで過去へとび過去を都合の

良いように改竄し、現在や未来を変えることを最大の目的とするもので、なお過去が改竄された場合タイムパラドックスが起き『時の運行』が乱れその結果誰も想像できないような恐ろしいことが起こります。』

「ていう訳、理解かつた?」

「じゃあさつきの姿は?」

ティアナが問いつ

「あれはイマジン倒すための電王って力。』

「電王?」

「INのライダー・パスをつかつて変身するの、はい質問終わりっ。』

「え、ちょっとー。』

このあと結局質問は続き幸太郎が答えないとティアナが答えたらしい。

運命の出会い（後書き）

はやて「はやてと」

テディ「テディと」

2人「特別予告」「——ナ——」

テディ「今日は次回予告ではなく今度作者がやる予定の特別大長編の予告だ」

はやて「感想に『平成で一番好きなライダー（主人公限定）』を書いてどしどし送ってください」とのことや」

テディ「見事1位になったライダーは特別大長編にゲスト出演します！」

はやて「なお、どうしても1人に選べない場合は1～3位までのランキングをつけて送って下さい」

テディ「ちなみにあまりにも投票が少なかった場合この計画は破綻しますその場合は後日あらためて発表します。」

はやて「しみきりは11月22日までです」

2人「ではよろしく（よろしく）お願いします」

機動六課と予想外の再開

「なるほどな。まあ幸太郎君とテデイが何者かは大体分かったし、そつちにもこいつちが何者かは分かつてもらつたやろ?」

「ま、大体はな。」

「それでこれが最後の質問やねんけどな。」

「何?」

幸太郎は少しちゃんとさうだった

「テデイの話がホンマやつたら幸太郎君たちは平行世界から来たことになるやろ、そんなん時空管理局でも到底ムリな話やのにどうやって来たんや?」

それは正体がどういうより単純な好奇心による質問だった

・・・しかし幸太郎はあまり気持ちのよさそうな顔をしていなかつた

「・・・ちょっと前にライダー大戦つていういろんな並行世界を巻き込んだ戦争があつたんだよ、それには俺の身内も巻き込まれてそん時さつき話したオーナーって人がどうやつたのかは知らないけどその身内を並行世界へ送つた時とおんなじ方法で来たんだよ。」

「あ・・『めんなー!』幸太郎君」

今までになかった幸太郎のまじめな態度にはやても驚きながらも謝

罪する

「ま、じいちゃん生きてるし別にいいけど。」

一瞬で戻った。

「そつか、で幸太郎君ここからが本題やねんけどな」

はやてがワンテンポおいてから言つ

「機動六課に協力してもらえへんやろか?」

この言葉にはさすがに迷うそぶりを見せる幸太郎

「こ」の機動六課は正直人手不足でやねん、それで幸太郎君のさつき

戦つてたときの映像を見たんやけど

幸太郎君に民間協力者つて形でぜひ協力してほしいねん。」

「こ」の機動六課は危険な任務を請け負つことも多い。場合によつたら死ぬかもしねへん。だからもちろん断つてくれてもいいんやで。」

「・・・俺たちも元タイマジン追つかけてきた時点で危険は承知の上なんだ、イマジンに関する情報があれば必ず教えるつて約束なら協力してもいいよ。」

幸太郎の返答にはやての顔色がパアアッと明るくなる

「ほんまかー? テーテイもええねんな?」

「幸太郎が決めたこともちろん。」

わざわざから無言だったテテイが即答する

「じゃあ、改めてよろしくね、幸太郎君。」

「うん、よろしく。」

なのはが幸太郎に言つ

「よろしくね、幸太郎って呼んでいいかな?」

「別に何でもいいよ。」

フロイトと挨拶を済ませる

「おまえは我のお供その四だ。」

「……。」

機動六課のメンバーが驚く中、幸太郎が無言のアッパーをクリーンヒットさせる

「なんで、お前がいる訳?」

幸太郎が問うが返事がないただの屍のようだ

「幸太郎さん!何ですかこれ!?」

スバルがジークをつきながら言つ

「これは見なかつたことにしといて。」

幸太郎がジークを投げ捨てながら言つ

「え、あ・・分かつた・・」

ヴィータが全員に意思を代弁して言つ

「といふで、主はやて。」

「ん? どないしたんやシグナム?」

シグナムがはやてに提案する

「彼等の戦闘データを取るためにも、彼等が言つていた電王という力とぜひ一度、模擬戦を行つてみたいのですが。」

「う~ん、たしかになあ。ビーや幸太郎君やつてくれるか?」

「俺たちは別にいいけど。」

幸太郎は特に迷つた様子もない

「たしかに2人の実力も見たいしな、わかつたわ模擬戦は明日や。」

機動六課と予想外の再開（後書き）

フェイト「フェイトと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「なぜ、ジークが・・・」

フェイト「いきなり殴つちゃつたけど大丈夫なも？」

テディ「それは大丈夫ですから、安心してください。」

フェイト「でもこの子何しに来たんだろ？」

テディ「それは次回幸太郎と聞いて見ます。」

フェイト「シグナムとの模擬戦もあるのに大変だね。」

テディ「ご心配痛み入ります。」

フェイト「さつきから敬語使つてるけどもう仲間なんだからそんな

に硬くならなくていいよ。」

テディ「え、あ、はい。」

フェイト「では次回もお楽しみに。」

将との戦い（前書き）

以前から応募している平成主人公ライダーアンケート
ぜんぜん来てないので応募お願いします。

将との戦い

「ん？」

「どうしたんだテディ？」

「いや、ジークの背中に何か貼り付けられている。」

テディは倒れているジークの背中に貼られていた紙を取る

「幸太郎！」これは良太郎からの手紙だ！」

「テディ読んでみてくれ。」

幸太郎の言葉とともに機動六課のメンバーもテディの周りに集まる

「読むぞ、

『幸太郎へ

また巻き込んだじゃつてごめんね、僕のほうもできるだけ早く終わらせて手伝いに行くから。

ジークはたまたま見つけて、協力してくれるみたいだから行つてもらつたんだ。

幸太郎が協力してくれて本当うれしかったよ。

良

太郎より』

SIDE

幸太郎

「じいちゃん・・・」

送つてきた物^{バカ}はともかく、純粹に俺の心配してくれたのがうれしかった

『あつ、それとジークを幸太郎のところ送つたのはモモタロスの提案だよ結構いいところあるよね。』

と書いてある。』

・・・は？え、何？じいちゃんあのモモタロスが本気で『心配』すると思つてんの、ていうか絶対に嫌がらせでしょ。どうかんがえても。あ、なんか腹抱えて大笑いしてるモモタロス見えてきた。いや、してるに違いない。帰つたら殴ろう、あのエセ赤鬼。

幸太郎

SIDEOUT

「え～っと、つまりのやもイマジンだけど仲間つてことドリーニのかな？」

なのはが幸太郎に問う

「厄介押し付けられただけだけだよね。』

幸太郎は冷静なでも誰がどう見ても怒っている顔で答えた

とりあえずこの話題はここまでにしたほうがいいと本能的に悟った
六課のメンバーであった

「じゃあ今日はこれまでー解散」

はやての合図が出ると六課のメンバーはそれぞれ帰つていき
幸太郎とテディとジーク（氣絶）はフロイトに今日から自分たちが
泊まる部屋まで案内してもらつた

翌日

六課のメンバーの訓練が終わったところでシグナムと幸太郎の模擬戦が始まろうとしていた

「準備はいいな、野上」

「セットアップ」

シグナムは甲冑を身に纏い愛刀レヴァンティンを握る

幸太郎もミニヨージックホーンをならしながらライダーパスを使う

「変身」

・・・・・・・・・・・・

「へえ～あれが電王か。」

観戦席にいるはやてが感心したような声をだす

「かつこいい・・！」

エリオは自分の世界に入っていた

・・・・・・・・・・・・

「テデイ」

幸太郎が一回指を鳴らすとテデイが幸太郎の愛刀マチュー・テデイへと変わる

「ヴォルケンリッター烈火の将、シグナム参る！！」

「言つとくけど俺の強さは・・本物だよ！！」

戦いが始まった

幸太郎は相手に自分の体を密着させるアクロバティックな戦い方でシグナムの隙をうかがう

幸太郎がマチエーテディで切りかかった瞬間

「私にいつまでも同じ戦法は通じんぞ！」

シグナムは幸太郎の攻撃を受け流し反撃をきめた
しかし幸太郎はすばやくマチエーテディで地面を撃ちシグナムと距離をとる

「ふふ・・いいぞ、それでこそ戦い外があるーー！」

「昨日から薄々思つてたけどこの人バトルマニアなわけ？」

「おそらくそうだらう」

幸太郎の質問にテティが即答する

キイン！キイン！

剣がぶつかり合つ音が響く

「（なるほど・・）いつ確かに強い、だが！」

シグナムが幸太郎の攻撃をはじきそのまま空中へと浮かびあがる。

「それってあり？」

幸太郎の言葉など完全に無視しシグナムが攻撃態勢になる

「レヴァンティン！」

→シュランゲフォルム

レヴァンティンの刀身が鞭のように伸びて幸太郎に不規則的な攻撃ををする

「けつこうやるじゃん……でも」

幸太郎は鞭を地面にたたきつけるとそのまま鞭の上を走ってシグナムに接近した

「何ー？」

シグナムからも驚愕の色が見て取れる

「ハアアアーー！」

幸太郎はシグナムのすぐ近くまで来るとそこでジャンプし上からシグナムを地面にたたきつける

・・・・・・・・・・・・

「す、じい・・・！シグナム副隊長と互角いやそれ以上で戦つてゐる。」

ティアナが驚きと嫉妬すら含んだ視線を幸太郎に向ける

「ほんとにす、じいよ、それにシグナムが楽しそうにしてるし。」

フェイトはまるで子供を見る親のような目で一人の戦いを見ていた

・・・・・・・・・・

「わるいけど、こっちもあんま時間ないし次で決めさせてもらうよ。

」

「いいだろう、レヴァンティン、カートリッジロード！？」

『Final Charge』

二人が距離を詰める

「紫電一閃！？」

「カウンタースラッシュ！」

普段は技名はいわない幸太郎だが今回はなんとなく言つてみた

「「うおおおおお！」」

剣と剣がぶつかる

そして立っていたのは

・・・・・シグナムだった、幸太郎は後方数メートルへ吹っ飛ばされていた

しかし、彼女の首には剣の先端のようなものが突きつけられていた、
それは「テンガツシャーネードフォーム」のものである

そして「テンガツシャー」の柄を持った幸太郎が言つ

「これで俺の勝ちでしょ？」

将との戦い（後書き）

スバル「スバルと
テディ「テディの」

2人「次回予告」「ナーナー

スバル「シグナム副隊長に勝っちゃうなんて・・・」

テディ「正直危なかつたが、なんとか勝てた。」

スバル「ところであの鳥は？」

テディ「さつき田を覚ましたのでこれから詳しい話を聞くつもりだ。

スバル「へえー、ね 私も一緒に行つていい？」

テディ「ああ、大丈夫だ。」

厄介者（前書き）

これからしばらくテスト期間なので次回の更新は12月1日になります。

ごめんなさい！！

厄介者

「嘘だろ！……アイツ、シグナムに勝つちまつたぞ！」

「まさか、幸太郎君一ノ刀流やつたとはな・・・」

ヴィータとはやてが驚愕の声を漏らす

「なんか、ちょっと卑怯な気もしますけど・・・」

スバルが正直な感想を言つ

「いや、野上は何も卑怯なことなどしていない。実戦では予想できない事態に陥ることなどいくらでもある、それに気づかなかつた時点で私の負けだ。」

戻ってきたシグナムがスバルの意見を否定する

「だが、幸太郎が完璧な状態であそこまで追い詰められたのは久しぶりだ。あの時幸太郎が機転を効かせていかつたら負けていたのは私たちだ。」

テディがシグナムにフォローを入れる

「それはそうと、俺達の力はここではどれくらい通用するわけ？」

幸太郎が話を本題に戻す

「ああ、そうやつたな、シャーリー。」

はやてがそう言つと奥のほうからめがねをかけた濃いブラウンの髪の女性がやって来た

「はーーーい。」

「二人の模擬戦のデータの解析はもう終わっていますよ。」

「あんたは？」

幸太郎がシャーリーと呼ばれた女性に問つ

「はじめまして、シャリオ・フィニーノです。シャーリーって呼んでください。」

「知ってると思つけど、野上幸太郎」

シャーリーと幸太郎が挨拶を済ませる

「八神部隊長、彼、すごいですよ！！彼の力は魔法とは別のものですけど、魔力値に変換したら何と彼のランクはS-です！」

その瞬間、時が止まった・・・

「マジかい！」

はやてが驚くのも無理がなかつた。それほどどの力を持つものは時空管理局でも数えるほどしかいないからだ

フォワード陣にいたつては開いた口が閉じなくなつてしまつている

「それがどれくらいす」「このか分かんないけど、じいちゃんはもつと強いよ。」

幸太郎がこの場でさりとてでもないことをいつ

もはや誰も話せなくなっていた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「で、幸太郎君はこれからどうするん?」

部隊長室に戻つてやつと全体の空気が落ち着いたころにはやでが幸太郎に聞いてきた

「とりあえず、ジークに話を聞いてみるよ、じいちゃん達から何か
聞いてるかもしないし。」

「それなら、私達も一緒に聞きたいし、よかつたらここに連れて来て
もらえんかな？」

「ああ、別にいいよ。」

「私も一緒に行こうか？」

テディが提案するが幸太郎が一人で十分だというので渋々あきらめた

そして幸太郎は部隊長室を出て行く

・・・もちろん彼がドアに挟まれたのは言つまでもない

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「遅いな。」

幸太郎が部隊長室を出て20分がたつていた、さすがに遅すぎるの
でシグナムが口に出した言葉だ

「幸太郎・・・もしかしたら道に迷つてるんじゃ・・・」

フェイトが幸太郎を心配する

「少し様子を見てきます。」

「あ、だったら私も行くよ。」

テディとスバルが部隊長室を出て行く

そして幸太郎とテディの部屋に到着する

そして彼女達が見たものは！？

…………部屋の中のソファーでえらそうにふんぞり返つて
どこから出したのかオロのミンヒをグラスに入れて飲んでいる幸太
郎だった。

「あれ？ 幸太郎さんなんか雰囲気変わりました？」

スバルもさすがに変だと思つたのかテディに問う
しかしテディから答えが返つてくることはなかつた

「貴様、幸太郎から早く出て行け！！」

いつものテディからは想像もできないよつな声でテディが幸太郎?
に掴みかかろうとしていた

しかし・・・

「主に手を上げるとは何事か！！」

幸太郎？ がそういうとテディはまるみる縮んで最終的には手のひら
サイズになつてしまつた

「え！？ ちょっと大丈夫！？」

スバルが小さくなつたテディを拾う

「あれ、どうなつてんの？」

スバルの質問にテディは悔しそうに答えた

「ジークに憑依された・・・」

「憑依って、ジークって味方なんじゃ？」

「ああ、だが見ての通りとても厄介なやつなんだ、おそらくまためちゃくちゃな因縁をつけられたのだろう。くつ あの時やはり幸太郎といつしょに行つていれば・・・」

テディが後悔と自虐を始めたため代わりにスバルがジークに話しかける

「え~っとジーク、私達と一緒に来てくれないかな?ちょっと話があるんだけど・・・」

「なぜ私が動かなければならぬ?動くのは私ではなく世界のほうだ!」

「え~っと

つまり話があるならそっちから来いと?

仕方なくスバルは一度部隊長室に戻り大まかな説明をし、そして今度はフォワード陣と隊長たち全員で来た

「これはまた、すごい変わりようだね・・・

なのはが驚きと呆れたのを混ぜたような声で言つ

「おい、そこの女。」

「え? 私?」

視線を向けられたスバルが戸惑う

「 そうだお前だ、私は腹が減った何か料理を持つて来い。」

おそらく指名されたのがヴィータだつたらブチ切れていた命令をする
スバルが何か食べ物を探しに行つている間に残つたメンバーで臨時
会議を始めた

「（で、あれはどうすれば戻るのよ？）」

ティアナがティに問う

「（前に門矢士という人物が憑依されたときは殴ればジークも一緒に
外へ押し出されていた。）」

「（要はたたけば直るんだろう？簡単じゃねえか）」

「（ヴィータちゃん、そんな昔のテレビみたいな言い方したらかわ
いそうだよ。）」

「（とりあえず、スバルが戻ってきて飯を食べて油断している時が
チャンスだろ？）」

そしてスバルが戻ってきてジークに食堂でもらつてきた適当な食事を渡したそしてジークが料理を食べ終わり次の皿を命令すると同時にヴィータが腹を殴つた、力任せに本気で殴つた。

そしてジークと幸太郎が分離する

「何をするー無礼者ー！」

「うぬせーよーめんぢくせえー！」

ここから腹を抱えながら悶える幸太郎をよそに、ヴィータとジークによる低レベルな悪口大会が起きたのは別の話

厄介者（後書き）

「ヴィータ」「ヴィータと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「ナニ」

テテイ「ひどい言い争いだつたな。

ヴィータ「結局あたしが勝つたけどな。」

テディー（というか、ほとんど会話が成立してなかつたような・・）

ガラニタ「カミツレ」

テヴィ「二二三の呼びがけ……」

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての才能がある必要はない。」

アーヴィングの天井

卷之三

ヴィータ「え、つと、とりあえず次回はホテル・アグスタでの任務だ！！」

テテイ「

番外編 狸のサンタさん（前書き）

テスト勉強の合間にじうしてもやりたかったので
まあ、クリスマスついぶん先ですけど。

番外編 狸のサンタさん

皆さん、こんばんは。機動六課部隊長 八神はやてです。

今日はクリスマスといふことなので旦々がんばつている壁にウチからプレゼントを配りつとこう計画や…（ちなみにクリスマスのことは事前に話してあって、欲しい物は紙に書いて靴下に入れておくよつて説明済み。）

ところで、最初の獲も・・・プレゼントを配るのはー

我が幼馴染じとなのはちゃん…そしてフロイトちゃん

・・・・・・・・・・

よし、なのはちゃんとフロイトちゃんの部屋に到着。さてなのはちゃんとフロイトちゃんは何をお願いしたんかな？

高町なのは

『特に無し

フェイト・T・ハラオウン』

・・・・・見なかつたことにしょ。・・・いや、だつてねえな
のはちやんの苦労は分かつてるけど、老人相手にマッサージ機持つ
てこわせる氣やつたん、なのはさん?
あと、フェイトちゃんそれやつたら最初から書かんといて、しか
もキレイな字で

わあ、次、行つてみよ~

次はスバルとティアナやー!

・・・・・・・・・・・・・・

さあ到着しました、さてスバルとティアナのお願いは！？

『アイス

スバル・ナカジマ』

『執務官の座

ティアナ・ランスター』

大変です、皆さんこの子達はサンタを何だと思っているんでしょう？
アイスはまあ・・・まだ良い、でもこれはあかんやろ、サンタに権力
を要求する子供初めて見ましたよ。

とりあえず、スバルの靴下にガリ○リ君をいれてつと。さあ次次！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

来ました！幸太郎君とテディーとジークの部屋です。

さて、幸太郎君のお願いは！？

『人並みの幸せ

野上幸太郎』

『出番

テディ』

・・・・・あれ？目が霞んで見えへん。おかしいなあ何で涙が止まらんのやろ。

- - 15分後 - -

ふう、なんかもう嫌になつてきたな、あかんは最近の若者は・・・

エリオとキャロとヴィータとシグナムのお願いを見せたろか？

『お兄さん

エリオ・モンティアル&キャロ・ル・ルシエ』

サンタに人身売買しようと？

『手羽先の謝る姿

、ヴィータ

何があった！？

『宇宙一強いやつと戦いたい

シグナム』

無理。

さて、寝よっ！

もつ、手に負えません！

電王の新しい翼 前編（前書き）

今度もう一本「リリなの」と仮面ライダーのsss書いひとつで
すけど次のうちどれがいいと思います？

?天の道を行き総てを司る男の息子が主人公（カブト）
?ディケイド版地獄兄弟のその後（カブト）

?火野映司が主人公（オーズ）

ちなみに大長編のアンケートは延長することになったので、これか
らもぜひ送ってください。

電王の新しい翼 前編

「さて、サンタをドリーンボールと勘違にしてる監視、リリまでの流れと今日の任務のおさらいや。」

移動するペリの中ではやてが六課のメンバーに言つ

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者、およびレリックの収集者は現状ではこの男、違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者D・ジエイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める。」

はやてがそこまで言つた所でフロイトが話をつなぐ

「LJたちの捜査は主に私が進めるんだけど、皆も一応覚えておいてね。」

「「「「はい」「」「」」

フォワード陣の返事を聞くと今度はワインフォース?が話を続ける

「で、今日これから向かう先がここ『ホテル・アグスタ』

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護、それが今日のお仕事ね。」

なのはが言い終わったところで幸太郎が質問する

「ところで俺とトトトイはどうすればいいの?」

「私もいるや。」

「幸太郎君とテティちゃんは私たちと一緒に建物の中の警備だよ。」

「なぜ、これらは私の名を言わぬ？」

ジークにやう聞かれても苦笑こするしかできないフオワード陣であった

「あの、シャマル先生をつきから気になつてたんですけどその箱つて？」

キャロの間にシャマルと呼ばれた女性は答えた

「ん？ああ、これ？隊長たちのお仕事着。」

シャマルがそう答えると彼女のポケットから何かビンが落ちた

「なにか落ちましたよ。」

テディがすかさずそれを拾いシャマルに渡す

「あ、ありがとうございます。これいい傷薬だから一応持ってきたんだけど、いつも臭いのよね。」

「へえ。」

幸太郎がそのビンに触ったのが運の尽きだった

突如そのビンのふたが完全に物理法則を無視した飛び方をしたのだ

「つおー！」

もちろん被害は幸太郎だけではなくヘリ全体に届いた

狭い密室・・・ニオイが充満するのに時間はかからなかつた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふう、ひびい田にあった・・・」

疲れ果てた顔のはやてがそづくまあ無理もない

「あれ、そういえば幸太郎君は?」

「あ、あそこにあるよ。」

「ああ、皆さん 良かつた見つかって。」

「え! 幸太郎君・・・だよね?」

なのはがそう聞くのも当然だなぜなら今の幸太郎は執事服のようなものをして黒髪にも一部青いメッシュが入つていて要は雰囲気が変わっていたのだ

「今はテ^テイです。幸太郎が『さつきの』で氣絶してしまったので。

」

「幸太郎がなのは達に向かつてサムズアップする

「そつか、テ^テイちゃんも憑依出来たんだったね。」

なのはも納得したようでそれ以上の質問はしてこなかつた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そしてティアナが考え事をしていた場所の近くの森にフードを被つ

なのは隊長は時空管理局のエースで、フェイト隊長も優秀な執務官、ハ神部隊長に至ってはSランクの魔導師で四人の守護騎士まで従えている。

エリオとキャロはあの年でBランク

スバルは馬鹿だけど、潜在能力と可能性の塊

そして、突然やってきて時を守るために来たという、シグナム副隊長にすら勝った2人

やっぱり凡人は私だけか・・・

だけどそんなことは関係ない私は立ち止まるわけにはいかないんだ

!!

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

た男と紫色の髪をした少女がいた。

少女の指には虫のよつたものが止まっていた

「ドクターの玩具が近づいてきてる・・・。」

「つークリールビントのセンサーに反応ーシャーリーー」

ガジヨツトドローンとの戦いが始まったのはそれから数分後の」と
であった・・・

電王の新しい翼 前編（後書き）

ジーク「プリンスと」

T幸太郎「T幸太郎の」

T幸太郎「次回予告コーナー」 つていつしょに言ってくれ……」

ジーク「なぜ私がそのような事をしなければならない？」

T幸太郎「そんなことを言つていたら次回の出番が消されてしまうぞ。」

ジーク「バカな・・・我が出番が・・・消える・・・？」

幸太郎「（やつと目覚めたのにどうなつてんのこの状況？）」

ジーク「しかたない、次なる話で我が力を貸してやろう。」

電王の新しい翼 後編

ホテル・アグスタでは現在、隊長達を中心としたガジェットとの戦いが繰り広げられていた

情報を受けたT幸太郎は戸惑っていた

「早く皆を助けなければ・・・幸太郎、早く目を覚ましてくれ！！」

そう、もう一人の電王と違い幸太郎はイマジンを武器に変えて戦うため幸太郎が気絶した状態では変身できないのだ

「！」の時を待つていた！！

テディが戸惑っていると、どこからかやってきたジークがテディを追い出し幸太郎の体の主導権を手に入れていた

「ジーク！何をするつもりなんや！？」

いつもは軽いノリのはじてだが、さすがにこの事態にジークに付き合っている暇はなかつた

「なに、家臣のピンチを救うのも主の務めだ。」

W幸太郎はそう言つと外へ向かつて歩いて歩いていった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「スバル！クロスショートへいくわよー！」

「応！ー！」

ティアナはクロスミラージュに魔力を込める

「（証明するんだ・・特別な才能や、すごい魔力がなくたって・・・）」

「私はランスターの弾丸はちゃんとうちぬけるんだって！」

「クロスファイアショート！ー！」

ティアナの弾丸がガジェットを次々破壊していく、しかし・・・

「え？」

軌道がずれた一発がスバルに直撃しようとしていた

スバルが直撃を覚悟した瞬間

——フュン

突然飛んできた金色のベルトによつてスバルは守られていた、そし

てそのベルトはそのまま滑空して行き・・・W幸太郎の腰に装備された

そして少し遅れてやつてきたヴィータがティアナを怒鳴りつける

「ティアナ！このバカ！無茶やつた上に味方撃つてどーすんだ！！」

「やかましいぞ、少し静かにしろ。」

「なつー！ジークお前つ・・・！」

ヴィータはジークにも怒鳴りうとしたがそれより先にウイングバッклからミヨージックホーンが流れる、そして腰の後ろに手を当てながらベルトのターミナルバックルにセタッチさせる

「変身」

『Wing Form』

鳥の翼象つた形状のデンカメン

翼状のオーラアーマー

一瞬だけ現れたメカニカルなフォルムの翼

「降臨、満を持って！」

「え！？」

「おまえ・・・戦えたのか？」

ジークを怒鳴る^{うつ}としていたヴィータもあまりの事態に怒りを失い、目を見開いていた

『^{ウイング}WNEW電王の周りに無数のガジェットが近づいてくる

「我が刃の前にひれ伏せ！」

『^{ウイング}Full Charge』

『^{ウイング}WNEW電王がフルチャージしたテンガッシュ・ハンドアックスモードとブームランモードをガジェットたちに投げつけるとほとんどのガジェットが爆発した。ジークの必殺技『ロイヤルスマッシュ』である

「後はお前たちでやれ。」

ジークはそういうと幸太郎の体から出て行き、どこかへ行ってしまった

『Strike Form』

「え？ ちよつと？ 今どきゅう状況？」

いきなりシャマルの持っていた薬に意識を封じられて目が覚めたら電王の姿になり、目の前では呆然としているスバルとヴィータ、そして若干泣きそうなティアナがいる状況に幸太郎はかつてない戸惑いを覚えた・・・

？？？

私のせいでスバルが落ちるところだった・・・

私のせいでヴィータ副隊長を怒らせた・・・

完全に飾り物だと思っていたジークでさえあれほどの力を持つていた・・・

私は・・・私はっ！・・・・・・

？？？

S I D E O U T

「とにかくっ！お前ら一人ともすつこんでろーバカ共！！！」

ヴィータはそういうと一度言葉を切り

「行くぞ、幸太郎」

「えつー！あ、ああ。」

幸太郎と共に残ったがジェットを破壊しに行つた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おし、全機撃墜。」

「ハリもだ。」

「俺のほうも終わったよ。」

ヴィーダ、エリオキャラのところにシグナムとザフィーラそしてすでに変身を解除した幸太郎がやってくる

「ティアナは？」

ヴィータの問いにエリオが答える

「スバルさんと裏口の警備です。」

「そうか・・・」

「なあ、ティアナは一体何を焦つてんの？」

さつの戦闘を見ていらない幸太郎でも、ティアナが普段から異常ともいえるほど強くなろうとしていることが分かったそしてさつきのヴィータの様子、幸太郎が状況を判断するには十分だった

「お前には話しておいたほうがいいか、じつは・・・」

そして物語は続いていく

はやて「はやてと

テディ「テディの」

2人「次回予告」「ナーナー」

テディ「今回・・私は存在する意味があつたのだろうか・・・」

はやて「ああ～、言いにくいことやねんけどな」

はやて「テディ次回も出番少ないらしい。」

テディ「！――！」

はやて「しかもジークは幸太郎君に憑依して戦えることが分かつた
から、これからも・・・もしかしたら」

幸太郎「やめる！――すでにジークのライフポイントは0だ――」

はやて「ていうか、これって次回予告？」

戦いの理由

ガジェットの破壊が終わり、機動六課へと帰還した後のとある森の中、一人の少女が自主練をしていた

「よひ、もう4時間続けるし、ちょっと休んだら？」

「幸太郎さん・・・見てたんですか。」

「いや、さつき通りかかっただけ。」

やつてきた幸太郎がティアナに缶ジュースを投げ渡す

「ヴィータに聞いたよ、兄ちゃんのこと。」

「……どうしてヴィータ副隊長がそのことを…？」

「前にたまたま聞いたらしい。」

幸太郎がティアナの横に座る

ティアナの兄ティーダ・ランスターは首都航空隊所属の一等空尉で執務官志望のエリート魔導師だったが、ティアナが10歳の時違法魔導師の追跡する際、対象の魔導師との交戦に敗れさらに無能な上司から

役立たず呼ばわつされたのだ

「あなたも兄さんは役立たずだと思うんですか？」

ティアナにそう言われて幸太郎は少し昔のことを思い出していた

・・・・・祖父のことを弱者呼ばわりし、自分の強さを過信して敗れた自分自身を

「詳しいことはわかんないけど、アンタの兄ちゃんを役立たず呼ばわりした奴は哀れだな。」

「えー？」

思いもよらない幸太郎の答えにティアナは素つ頓狂な声を上げてしまつ

「俺も昔、一人の人を役立たずのつまんない奴って思つてたことがあるんだ、ほら、俺つて不幸だろ？」

「たしかに・・・」

?別世界に来たその日に事件に巻き込まれる

?作られて間もない隊舎のドアに挟まれる

?馬鹿に馬鹿を送られる

?ジークに憑依される

モモタロス

ジーク

?ヴィータに殴られる

?劇薬の臭いをかぎ氣絶

「で、それを全部その人のせいにして、自分は強いつて思い込んでた。」

• • • • •

ティアナは無言で幸太郎の話を聞いていた

「でも、結局は自分の弱さを思い知らされることになった、もし仲間が助けに来なかつたら俺は殺されてた。」

「幸太郎さんは強いですよ・・少なくとも私みたいな凡人よりかは・

ティアナは自虐的に言つた、幸太郎はこれ以上言つても無駄と判断したのかその場から去ろうとしていた

「まあ、俺はアンタは間違ってるとは思わないし、むしろ理屈ばつかり並べて何もしない奴よりはかなりいいと思うよ。でも一人で突っ走つてたら、いつか俺みたいな目にあうつて言いたいの。」

数日後

状況を簡単に伝えるならティアナが無茶をし、なのはに撃たれそうになっていた

「だから無茶すんなって言ったのに。」

「幸太郎、助けに行かなくていいのか！？」

テディが幸太郎にティアナを助けに行くよう促す。しかし、

「お前も見てただろ。今回は全面的にティアナが悪いでしょ、一度痛い目見たほうがいい。」

なのはの攻撃があたつた・・・と思われたが、ティアナは立っていた

しかし、彼女のオレンジの髪には紫のメッシュがかかるおり、さらに彼女の体からは白い砂がこぼれていた

「トーティー！」

幸太郎が指を一回鳴らすとティーティの体はマチュー・トーティへと変わる
そして彼はベルトにライダーパスをセタッチする

「変身」

『Strike Form』

「なぜ、彼女にイマジンが！？」

「多分ティアナの『強くなりたい』っていう意識を願いつて判断したんだ。」

「あたしも行くぞ！」

「うん！」

NEW電王ヒガヴィータ、フォイトはイマジンの元に進行して行った。
・
・
・
・

（幸太郎はスバルの作ったウイングロードの上を走っている）

戦いの理由（後書き）

エリオ「エリオと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「——」

エリオ「幸太郎さん・・ティアナさんを助けに行きませんでしたね。」

テディ「だが、もしなのはさんが2発目を撃つていたら助けるつもりだつたらしい」

エリオ「でも、なんか複雑な気分です。」

テディ「幸太郎は自分が悪役を買つて出ることができるタイプですから。」

テディ「それより、^{いつ}何時ティアナにイマジンが？」

エリオ「ちなみに次回が終わつたらまたギャグ路線に戻るそうです」

2人「では、さよなら～」

特別アンケート（前書き）

特別大長編のコラボは仮面ライダーブレイドに決定しました！！！
そして、今度もう一本書きたいといつていていたものがオーズがダントン
ツトッPなので、それぞれの予告編を作つてみました。
また、感想をお聞かせください。

特別アンケート

?天の道を往き、総てを司る男の息子が主人公（カブト）

題名 天の道を往き、総てを悟る

・・・かつて、マスクドライダーと呼ばれた者たちの戦いから4年後の世界

「それじゃあ、そろそろ行くよ。今までありがとうございました、ひよりお姉ちゃん、樹花お姉ちゃん（同じ年だけど）、蓮華さん、加々美さん、そして・・・お父さん。」

黒い髪に身長は170㌢後半くらいの青年がその場にいる間に別れの挨拶をしていた

「もし、何か困ったことがあつたらすぐに帰つて來い、ボク達は何があつてもおまえの味方だ。」

ひよりと呼ばれた女性が青年の肩を掴みながら力強く言つ

「まあまあ、永遠の別れじゃないんだし、また会えるつてーー。」

樹花と呼ばれた女性はそう軽口を言つて、しかし彼女の目に涙が浮かんでいた

「でも、本当に行つちゃうと想つたがじこです・・・」

蓮華と呼ばれた女性は本当に寂しそうにしつぶやいた

「でもな、別の道を行くからこそ『友達』らしいからな、だから今から俺たちは仲間じゃなくて友達だ。」

加々美と呼ばれた男性は青年の背中を軽く叩きながら言つ

「おまえは俺の息子だ、おばあちゃんが言つていた、家族として必要なのは血ではなく魂だと・・・だから自信を持つて行ってこい。」

そしてお父さんと言われた男、天道総司はかつて自分自身が言われた大切なことを息子に伝えていた

「はい、そうだ・・・お父さんが言つていた、俺は 天の道を往き、
総てを悟る男・・・俺の名は天道総悟！！」

そう言いながら青年・・・天道総悟は目の前にある巨大な機械に入つていき、そして消えた・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・それにしても、全てのゼクターを使うことができる、か・
・・・残酷だな。」

総悟が消えた後、加々美は軽く言つたしかしそう言つた彼の瞳はど

「か悲しさを秘めていた

「あの腐った『T2H計画』さえなかつたら、俺が代わりに行くところだつたんだが……」

「あいつが『大つ嫌いな自分の力を人のために使いたい』って言つたんだ、見送つてやるのが俺たち大人の役目だろ。」

加々美がそう言つと天道は目を見開き

「・・・まさか、加々美に説教されるとほな・・明日は鉛玉でも降るか？」

「降るかあーー！」

「さて、着いたな。ここが滅びかける世界か・・それにしても発達してるな・・・・とこりで、ここは何処だ?」

「・・・というか、君が誰なんかな?」

これが運命の出会いだった

? ディケイド版地獄兄弟のその後 （カブト）

題名 悪い旅 地獄気分 なのはの世界

「・・・着いたよ、兄貴。」

「ここが次の地獄か・・・」

突然現れたオーロラから出てきた特徴的なカツコをした二人組が話していた

「あれ、兄貴なんか俺たち囮まれてるよ・・・」

「 そうだな・・・」

彼等の周りには十数体の『ガジェットドローン』が集まっていた

「 むかつくなあ 兄貴、 ここからやりつけやおうよ」

そのとき不意にガジェットの一體が少し動いた

「 ・・・ お前、 今 僕たちを笑つたる?」

言うが早いか兄貴こと矢車^{やぐるま}想^{そう}は動いたガジェットに蹴りを入れていた

「 行くぞ、 相棒」

「 兄貴となら何処までも」

そして矢車と相棒・・・影山瞬^{かげやま しゅん}はバッタを模したゼクター『ホッパーゼクター』をベルトにはめ込んだ

「 「 変身」」

「 「 H e n s h i n 」」

「 C h a n g e K i c k H o p p e r 」

「 C h a n g e P u n c h H o p p e r 」

そして・・・彼等の姿はショウウリョウバッタを模した

緑の体に、複眼の色は赤、足にはバッタの脚の形をした特殊兵装ア

ンカージャッキ

茶の体に、複眼の色は白、腕にはバッタの脚の形をした特殊兵装ア
ンカージャッキ

マスクドライダーキックホッパー

マスクドライダーパンチホッパーへと変わる

「なあ、生きてるって虚しいよな・・・」

「お前たちも地獄を見せてやるよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「！」か！ガジェットが出やがったのは

「はい、民間人は住んでいませんが生命反応が一つあります！」

「ちつ、急ぐぞ」

ところ変わつて少し離れた場所、ガジェット出現情報を受けたヴィ
ータ、スバル、ティアナは人間が一人いると聞いて焦つていた。ど
んなに早く飛んでいつても（比喩じゃなくマジで）一人の救出に間に

に合わないのだ

そして、現場に着いた彼女たちは急いで反応のある方へと走った

「おい！無事かつ・・・て、おい 何だよ、これ・・・」

ヴィータ、スバル、ティアナは目を見開いた

そこにはまるで、数万トンの力で蹴つたか、殴つたかの形跡のある
ガジェットの残骸とそこに腰を掛ける2匹のバッタの怪物がいたのだ

スバルはその状況に軽い吐き気に襲われる

そしてそれに、縁の方のバッタが過剰に反応した

「貴様あ、今、俺たちを笑つたな・・・」

特別アンケート（後書き）

とつあえず、ここまでです。
本編もちゃんと更新するので是非、見てください
オーブン編の紹介はまた明日します。
では、是非、皆様のご意見をお聞かせください。

特別アンケート？（前書き）

アンケートはこれで最後です。
皆さんの意見をお聞かせください。

特別アンケート？

？火野映司が主人公（オーブ）

題名 リリカルなのは ～欲望のメダルと仮面ライダー～

「どうやあああ！！」

火野映司はいつものようにメダルの魔人『ヤミー』と戦い、そして勝利していた。

しかし彼が変身をとくと突然彼の体、謎の光に包まれた

「え、ちょっと　ちょっと！」

「映司……」

彼のパートナー？である、アンクが彼の名を呼ぶが、その頃には彼の姿は完全に消えていた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あれ、ここは？ 真っ暗で何も見えないよ。」

映司が目を覚ますとそこは、真っ暗でどこまでも広がっている宇宙のよつやかな空間だった

「よお、起きたか。」

映司は声のしたほうを見たするとそこは自分と同じくらいこの年の男性が立っていた

「君は・・・」

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ、そんなことよりお前にさつさと伝えなきやいけないことがあるからしつかり聞け、『仮面ライダーオーズ』」

「...何でそれを」

「まあ、事情は大体分かってるから。それよりお前の世界に厄介な奴らが行つたせいでめんどくさいことになつてる。お前は目を覚ましたら別の世界にいる、でもその間は俺と俺の仲間がお前の世界の『滅びの現象』を抑えておく。だから帰つてこれる機会がすぐに帰つて來い」

そう言い終えると男の姿は少しずつ消えていった

「え、ちょっと待つてよ ゼンゼン訳わからんないし、それにどうしたら元の世界に戻れるんだよ！？」

「……………」

男の声はそこまで途切れた

「……………」

映司は目を覚ますと驚愕した、明らかにそこは自分が元いた世界とは違う世界だからだ

「さっきの……夢じゃなかつたのか……」

突然の事態に困惑する映司、そして彼は自分の手に握られているものに気が付いた

それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「俺の・・・・・パンツ・・・・・」

彼の手には明日はぐ予定だったパンツとその中に入れられた・・・

「うわっ！－何でこんなにたくさんコアメダルがあるんだ！－」

大量のコアメダルだった・・・・・・・・・・・・・・・・・・

特別アンケート？（後書き）

なのはまつたく出ませんでしたが、連載になつたらちゃんと出します。
ゴメンナサイ

黒い影（前書き）

ここからは本編です。
特別アンケートのランディングも是非送ってください。

「ティ、ア?」

スバルは突然雰囲気の変わったティアナに困惑していた
「とりあえず、貴様を殺せば契約完了だ。だからおとなしく殺され
てくれ」

明らかにティアナのものではない声を発しながらティアナ・・・も
といスピайдーライマジンはなのはを指差す

「でも、おまえじゃ無理」

そこには電王に変身した幸太郎がやつて来る

「幸太郎さん!! ティアは・・ティアはビビリやたんですか!」

スバルが必死に声を出しながら問ひ

「多分、ティアナの『強くなりたい』って気持ちをイメージが利用
したんだ」

「貴様・・電王か、ふふ 殺すのは貴様でもいいな。それに固長に
いい土産ができる」

「みんな、とりあえずティアナからイメージを吊り出すぞ」

「う、うん」

なのはも動搖しながらも武器を構える、傍にはヴィータとフロイトもいる

「フム、この小娘を人質にしてもいいが、それでは何時まで持つまい。ここはおとなしくこの小娘から出て行こう。」

スパイダーライマジンはそう言つてティアの体から出て行き、NZONE電王達から距離をとる

「スバルはティアナつれて下がつてろ、あれはあたし達がやる」

「は、はい」

ヴィータがスバルに乱暴な口調で言つ

スバルは落ちてきたティアナをキヤツチし、おとなしく下がつていった

「なのはもだ」

「えつー。」

幸太郎の言葉になのは小さな驚きを見せる

「何があつたかは知らないけど、伝えられる内に伝えないと大切な存在がいなくなつてからじや遅いよ」

なのははその一言で全てを悟つた

「・・・うん、ありがとう幸太郎君。私も大切なこと忘れてたよ・・・

」

なのははそう言ひとスバルとティアナを追つて飛んでいった

「はあっー。」

NEW電王がマチュー・テディの銃口からスパイダーライマンに向かって弾を発射する

だがスパイダーライマンはそれを軽くよけるとNEW電王に反撃をしようとする

しかし・・・

ソニック ムーブ

「遅いよ」

「なっ！…」

すばやく後方に回ったフロイトは、ヴィータの方に吹っ飛ばされてしまつ

「」いで吹つ飛べ、ビヨウああああ……。」

ヴィータが謎の奇声を上げながらアイゼンでスパイダーライムをぶん殴り、NEW電王の方へと飛ばす

「お前ほんとに口ほどこもなかつたな、ハアツ！」

NEW電王がカウンタースラッシュで止めを刺す

「うぐあああ、ぐ 団長が・・必ず・・お前ひ、電王を消して・・
・・・」

イメージンの言葉はここで途切れた

「やう言つても意味ないけど、じこちゃん達と俺達をなめんなよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ん、あれスバル？・・・私は、確か・・・」

「ティアーー、良かつたーーー！」

「わつ、ちよつと抱きつかないでよ、気持ち悪い」

「ティアだ、この態度はティアだ！」

「喧嘩売つてんの？」

イメージに憑かれてからの記憶がないティアナにとっては今の状況はとてもめんどくせかった

「ティアナ」

「…・なのはさん」

なのはは全てを話した、自分が基礎しか教えなかつた理由、自分が無茶をしたこと

そして・・・・

「ティアナ、クロスミラージュちょっと貸してくれるかな?」

「あ、はい」

ティアナはクロスミラージュをなほに手渡す

「システムリミッター、テストモードリース」

はい

「命令してみて。モード?つて」

「モード?・?・?・?」

セットアップ ダガーモード

ティアナがそう命じると、クロスミラージュからオレンジ色の刃が現れ、接近戦に向いている形になった

「ティアナは執務官志望だもんね、個人戦のときのために用意はしてたんだ」

ティアナは遂にこらえ切れなくなりなのはに抱きついて泣いた・みんなが見ているにもかかわらず泣き続けた

そしてティアナが泣き止んだ頃

「よつ、落ち着いたみたいだな」

戻ってきた幸太郎がティアナに言つ

「幸太郎さん……私、今さらですけど、幸太郎さんの言つていた事が分かりました。自分の目標のために努力することと、無茶することは別だつたんですね。」

「さあ、なんだつけ？」

幸太郎は恥ずかしいのかそっぽを向いてしまった

そして、そのせいでなぜか落ちていた空き缶に足を滑らせ、派手にこけて大笑いされたのは別の話……

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それにしても、見事にやられましたね。」

白衣の男が黒いイマジンに言つ

「なあに、俺様の『悪の組織』はこれからが本番だ。電王とゼロノスそしてキバ！」

「こいつらに復讐するまでは何度も潰しにかかるやるや。」

黒いイメージはそのまま言葉を続けた

「おい、スカリエッティ　お前の協力者の男がいただる、あいつら少し借りるぜ」

「それは私ではなく、彼らに直接頼んでもうえるとありがたいんですけど」

「へつ、そーかよ」

黒い影は着実に動いていた・・・・・・

黒い影（後書き）

キヤロ「キヤロと
テディ「テディの」
2人「次回予告」「ナーナー」
テディ「私の居場所はここだけだ・・・」
キヤロ「テディさん、しつかりしてくださいー部屋の隅で体育座り
しないでくださいよ~」
キヤロ「次回は遂に新展開、そして伝説の英雄達の出番も近い!?」
テディ「幸太郎が活躍しているのはうれしい、でもなんか寂しい・・・」

番外編　日常（前書き）

次の連載候補の現在の票は・・・
?天道総司の息子が主人公・・・2票
?地獄兄弟が主人公・・・0票
?オーズが主人公・・・3票です
まだオーズに決定したわけではありませんので『特別アンケート』
を見て是非感想を送つてください

番外編　日常

ティアナに憑いたイマジンを倒してから3日がたつたある日……

「暇だな・・・」

「ああ、暇だ・・・」

幸太郎とテディは暇を持て余していた

「イマジンの情報は何か届いていないのか？」

「特にイマジンの情報もなければ任務も無いから言ってんの

椅子に腰掛けながら軽くため息をついた

「そうか・・・」

「なあ、テディ」

「なんだ？」

幸太郎が切り出した話題は

「ヴィータってモモタロスに似てないか？」

「ああ～、確かに」

驚くほどじつでもいい話題だった

「怒りっぽいとか、ジークとかティーディの呼び方までおんなじ
だし、それに赤いとかな」

「某、時を走る列車の中へ

「ぶわっくしょおおおーーーー！」

「なんや桃の字、風邪か？」

「あれ？でも先輩バカって風邪ひかないはずじゃなかつたつけ？」

「ああん、てめえ そりゃビーウー意味だ？」

「つまり、先輩がバカってこと。」

「んだとお、このスケベガメーーー！」

ドカツ、バキツ、グシャ、ドスン、「わーい、喧嘩だ 喧嘩だ～」
ボキツ、バチイイン
ドスツ、ポキポキ、メキツ、オラア、フン、ミシミシ、ドゴツ、ハ
ツ、トリヤ、ベキツ

（機動六課）

「なにか、今聞こえたような・・・」

「気のせいだる。それより、ずっとこいつしても仕方ないし、ちょっと散歩でも行くか」

「ああ、分かつた」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あれ、幸太郎君どうしたの？」

「よお、なのは 別に特に用事は無いから散歩してるのでだけだけど

「へえ そ、そつなんだ～だつたら私も一緒に行つていいかな？」

その時のはの顔が少し赤かった事に幸太郎は気がついてなかった

「うん、別にいいよなティティ？」

「ああ、もちろんんだ」

ここで、幸太郎の特殊スキル『祖父から忠実に受け継いだ不幸』発動！！

「野上……」んなとこにいたのか！？

「くつ、シグナム？」

「さあ、私ともう一度勝負だ！！」

「テディ、この人は突然やつて来て何言つてるんだ？」

「すまない幸太郎、私にも理解不能だ」

「お前との決着をもう一度しつかりとつけたいと思っていたのだ。
そうだ、ジークを使ってもかまわんぞ」

結局この日は一日中シグナムに模擬戦（と書いた全力）に付き合
わされる幸太郎であった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はあ～、せつかく幸太郎君と一人 テディは空氣 で出かけられると思ったのに・・・
シグナムさんてば・・・ま、でもまだまだチャンスはあるある」

休日と連休（前書き）

現在の票は

? 2 票

? 1 票

? 4 票です

ちなみに、ブレイドが出て来る特別編は本編がもう少し進んだら公開します

「…………といつわけで、今日はみんな一日お休みです」

フォワードメンバーの朝の訓練および模擬戦が終了し、そして無事に第一段階を合格したメンバーになのはがそう告げた

「「「「わ~い!」」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

それから少し時間がたち、幸太郎はテディ、守護騎士、隊長陣と共に食事をしていた

『……兵器運用の強化は進化する世界の平和を守るためにある……』

テレビでおっさんが何か言つている

「何だよ、この顔の濃いおっさん

幸太郎が皮肉たっぷりにテレビのおっさん……レジアス・ゲイズ中将に言つ

それがツボだつたのか、ヴィータが口に含んでいたスープを幸太郎に向かつておもいつきり吹いてしまった……

「熱つちいいい！！！」

「幸太郎……ゲホッ ゲホッ……スープ飲んでるときに笑わせんなバカ！」

「すみません！幸太郎の運の悪さは最近また、最悪ゾーンに突入してるので」

テディがヴィータの背中をさすりつつ幸太郎の顔を拭きながら言つ

「そういえば、幸太郎はこの後どうするの？」

復活した幸太郎にフェイトが聞く

「ああ、スバルやティアナが町を案内してくれるって言つから、イマジンの情報集めも兼ねて出かけるよ」

「へえー、私はお仕事あるから行けないな、残念」

なのはが小さくため息をつきながら言う

「あ、もうこんな時間か。行くぞ、ティイ」

「ああ

「…………」「行つてらっしゃしゃしゃーー」「…………」

「うん、行つてきます」

「それでは、行つて参ります」

ティイが敬礼する

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ティアナとスバルは知り合いから借りたバイクに幸太郎とテディはテンバーでに乗つて町に向かつた

バイクで向かつている最中ティアナがふと、何かを思い出したように幸太郎に問う

「そういえば、幸太郎さんつて17歳ですけど、免許持つてるんですけどか？」

「…………」

「幸太郎さん？テディ？え、ちょっと・・まさか・・・」

結局そこはそれ以降触れられないままだった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「スバル、それ、何なの？」

「何言つてるんですか幸太郎さん、アイスですよ」

幸太郎がゆつくりとティアナに視線を向ける

ティアナは黙つて頷くことしかできなかつた

なぜなら、今スバルが食べているアイスは・・・2段や3段ではなく、数えるのもめんどくさいアイスの山だつたからだ

それから、少し歩いたところで結構大きな人ごみができていた幸太郎はそこで準備中の司会のような人に聞いてみた

「あの、ここで何かあるんですか」

男は笑顔で答えた

「ああ、ここでもうすぐ俺が司会の『路上、歌唱大会』があるんだ。参加は自由だから君も出てみるか?」

「いや・・・俺はあんまりそういうのは・・・そうだ、こいつに似た変なの見かけませんでしたか?」

幸太郎がティイを指差しながら言つ

「あーーー見たよ」

「本当ですか!?」

男の答えに驚いたのはスバルだ

まさかこんなに簡単に手掛けりが見つかるとは思わなかつたのだ

「その話、詳しく聞かせてください」

幸太郎が男に問い合わせる

「うーん、じゃあ大会に出てくれたら教えてあげるよ」

「出ます！！」

幸太郎がそう言つと男はうれしそうに去つていつた。幸太郎をエントリーしに行つた様だ

「すゞい……幸太郎さん もう手掛けり見つかるなんてついてますね！」

スバルが幸太郎に言う

「あ、君ーじゃあもうすぐだから来てくれ

「はい、行くぞテディー！」

「え！？私も？」

「当たり前だろ」

そして幸太郎も去つて行き、大会が始まった

「それにしても、幸太郎さんの歌なんて聴いたこと無いけど、どうなのかしら？」

「私は上手だと思つけどなー」

そして幸太郎とテディの出番が来た、幸太郎の実力を疑っていたティアナは数十秒後に驚愕することになる

伴奏が流れる・・・

「未来に居る　俺が見れば　今の自分は多分
考え無し　ただ無邪氣　愚かに見えるかも」

「「R.I.CHT NOW」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「「こぼれ落ちる砂のように　この手から消える前に

動きだそうぜ Double - Action

俺が　私が　一人で・・・」

「「一つの声重なる時　最高に強くなれる

ずっとずっと Double - Action

気持ち　二人　誰にも止められない」

少したつてから伴奏が終わる

スバルとティアナは開いた口が閉じなかつた

「幸太郎さん、たぶん上手だろ? なあとは思つてたけど……」

「ティまで……！」までなんて……」

ティアナは幸太郎の歌唱力よりティの歌唱力にショックを受けていた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いやあ～、君達すごいね！ 文句なしの優勝だよ！」

「それより、こいつに似てるのって……」

「ああ、そうだつたね確か……」

『俺様の悪の組織に入りたい奴は付いて来い』とか言つてた黒いのがさつきその辺を……

男の話を聞いて反応したのはティだった

「幸太郎……まさか……」

「いや、あいつはじいちやん達が倒したはずだ

「幸太郎さん、『あいつ』って……」

スバルが聞きかけたところでティアナに通信が入つた……

休日と電王（後書き）

リイン「リインと
テディ「テディの」

2人「次回予告」「ナーナー

テディ「・・・なぜか、あなたには私に近いものを感じる・・・
リイン「テディちゃんはまだいいほうです・・私なんて3・4行く
らいしか」

テディ「次回・・・さらに人増えますね・・・」

リイン「そうですね・・・」

謎の少女と炎の心 前編（前書き）

スイマセン

今回PCの調子が悪くて短めです

謎の少女と炎の心 前編

「エリオー！ キャロー！」

スバルが一人の名を呼びながら近づいていく

「スバルさん、ティアさんそれに幸太郎さん、テディ」

「この子が通信で言つてた子か、ずいぶん小さいな」

幸太郎がボロボロになつた布をまとつた少女を見ながら言つ

幸太郎が男から話を聞き、そのまま調査を続けようとしていたとき、ティアナに通信が入つた

内容はロストロギアを持つたボロボロの少女を保護したことだった

「みんな！ ！」

そして、そこから少し時間を置きなのは達が到着し、シャマルが少女の様子を見ていた

「…………うん、大丈夫とくに体に異常はないし危険な反応も無いわ

「じゃあ、この子は私達がヘリで搬送するからまずはこのまま現場調査をおねがいね」

「…………はい」「…………」

少女に危険はないとシャマルが判断し、なのは達は少女を抱いてそのままへりに戻つていった

「じゃあ監、気合入れていくわよー。」

ティアナがそう言つと、フォワード陣は自分のデバイスを

幸太郎はNEDテノオウベルトにライダーパスをセタッチさせる

「「「「セットアップ！！」」」

「変身」

『Strike Form』

「「「「レディ・・・」」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

動体反応確認。ガジェットドローンです。

キャロの『デバイス』『ケリュケイオン』が静かに告げる

「来ます！ガジェットです！！」

キャロの声を聞き構えるメンバー達

「来た！」

ガジェットが姿を見せると同時にティアナがガジェットの軍団を撃つ

しかし、AMFという魔力を無力化させるバリアのせいであまり効果はなかつた

だが、幸太郎は別に魔術師ではないので……

「はあっ！？」

5・6体のガジェットを倒す程度1分もかからなかつたといつ・・・

「ま、こんなもんか」

ガジェットを全て倒したことで気を抜く幸太郎。それが悪かつた

ドカアアアアン!!

何かが壁（もちろん幸太郎がもたれかかっていた）を破壊してスバルたちに近づいていた

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

スバルに近づいていつた何か・・・それはスバルの姉、『ギンガ』だった

「いつしょに行きましょう、ここまでのガジェットは大体叩いてきたから」

「・・・・・・・・・・・・」

エリオとキャロは呆然としていた・・・

ギンガのこともそつだが

それ以上に、その後ろで日を光らせているの幸太郎に・・・・・

「・・・・・誰だか知らないけど、バカにしてくれんじゃん」

「えーあの、あなたは・・・」

「民間協力者の幸太郎さんだよ」

「その、幸太郎さん？私何かしましたっけ？」

プチッ（幸太郎の何かが切れた音）

「まあ、でもいつものことじょ」

バチバチッ・・ガシン（幸太郎がデンガツシャーを組みたてる音）

ここから幸太郎の怒りを静めるのにはガジェットを倒す以上に手間取つたという・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ん？ おい、アレ！」

幸太郎が悪魔になつてから少し進んだ場所で怒りを静めた幸太郎が驚愕の声を上げた

そこにはロストロギア『レリック』の入ったケースを持った紫色の髪の少女がいた

だが、彼女の様子が変だつた……。

彼女は自分達に気が付いていないのか、彼女の横の護衛のような黒龍に話しかけていた

「ねえ、ガリュー……ゼスト一体どうしちゃつたのかな……。アギトもいなくなつちゃうし……。『ネガタロス』に会つてから皆、なにか変……。」

少女の呟きは幸太郎たちには聞こえなかつた……。

ギンガ「ギンガと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「——ナ——」

テディ「すみませんでした幸太郎も最近溜まつっていたストレスが爆発したようで」

ギンガ「ああ、いえ悪いのはこちらですから」

テディ「いえ、しかし···」

ギンガ「まあ、そんなことより次回は超意外人物が仲間入り！？」

幸太郎たちは現在、ガリューと呼ばれた黒龍と戦っていた

「ハアツ！」

ギンガがガリューに接近して格闘し、吹っ飛ばされたといいでNEW電王がマチエーテディでガリューを撃ちまくった

やはり、NEW電王 + フォワードメンバー & ギンガが相手ではガリューも苦戦していた

その時

バツコーン!!

リインフォース? を連れたヴィータが天井を破壊し、援軍にやつてきた

「吹つ飛べ——！」

そしてそのままガリューを文字通り吹っ飛ばし、スバルたちの前に

立つた

「悪い、遅くなつたな」

「あ、あははは・・・やっぱ副隊長強~い」

ヴィータの吹つ飛ばし跡を見たメンバーは苦笑いするしかなかつた

「ん? おい、幸太郎は?」

ヴィータが突然そんなことを言い出した

「え、幸太郎君ならわつき私と一緒に・・・」

ギンガがそこまで言つたところで言葉に詰まる・・・

確かにわつきまでいたはずの幸太郎がいないのだ

「えへつと、その・・・言いにくいくらいですけど・・・」

「リイン、何か知つてんのか?」

「実はわつき・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『吹つ飛べ——！』

つじかイータちゃんが書つてあの黒い龍を吹つ飛ばしたとき

『ん？』

ちよつぢやの吹つ飛び先にいた幸太郎ちゃんが···

『うつやねねおおおおおお···』

一緒にお星様に···

···

• • • • •

— · · · · 全員！！」

はい

「幸太郎に黙祷！」

ジイイイ

「なんだよ！そんな目であたしを見んなー！」

「だつて……ねえ？」

「悪いのはあの不幸太郎の方じゃねえか！チッケシミオオオオオオ

ヴィータ、ダッシュで逃走。

テデイ、幸太郎さがしの旅に出発。

「つてあれ？あの女の子は？」

『あーー!』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いつてええええ」

その頃、吹っ飛ばされた幸太郎はどこか人気の無い裏路地まで飛ばされていた

「やっぱ、早く戻らないと……」

幸太郎がその場を立ち去ろうとしたとき、視界の端の方に何か赤いのが見えた

「ん? ··· つておい、大丈夫か! ! !」

それはよく見たら人だつた···

だが、普通の人間よりも明らかに小さく、ラインぐらのサイズだった

「うつ・・・なんだお前・・・?」

ボロボロになつている妖精よりもどちらかと言つと悪魔を連想させる小さいのは苦悶の表情だった

「俺は幸太郎、それより待つてろ、すぐに機動六課に運んでやるから!」

幸太郎の言葉を聞き、一瞬怖い顔になるが、すぐにその表情は消え
「Uの際、管理局でも何でもいい・・・頼む、旦那を助けてくれ!

「え!?

幸太郎はそこから少し、小さい奴の話を聞いた名前は『アギト』といい、どうやら管理局とは一応敵対関係らしい

「それで・・・あたし等のとこに黒い鬼みたいなヤツが来たんだ・・・
・旦那がそいつと2人で話したいって言うから・・・あたしは旦那を
待つてたんだ・・・それなのに・・・それなのに!・・・旦那が帰つて
きた頃には旦那はもう旦那じゃなかつた!・・・」

「どうじつことだ!?

「旦那の性格ががらりと変わつて、それであたしはあの黒いヤツに
問い合わせたんだ・・・そしたら旦那があたしに・・・攻撃を・

・「

アギトは泣いていた、そして幸太郎はその事態に心当たりがあつた

「アギト、多分だけどそのダンナはイマジンに憑依されてる」

「イマジンは知ってるけど・・・憑依？・・・ビツキ？」とだ―？」

「イマジンは他人に憑いて、その体を乗っ取る能力を持つてるんだ・・・でもお前の旦那は絶対に助けてやる！―」

幸太郎は力強く言った

「本當か・・・でも、あたし等は敵同士なんだぞ、なんで・・・」

アギトがそこまで言つたところで幸太郎が口を挟む

「俺も！・！」

「俺もおんなじだつたんだ、ずっと傍にいてくれると思つてた大切な存在がある日突然いなくなつて・・・でも、やつぱり大切だからこそ傍にいれなくなつたけど、最後はまた一緒になれたから・・・」

「

「さあ～て、いい話はそこまでだ」

「「一！」」

幸太郎とアギトが振り返るとそこにはアルマジロを模したイマジン・・・『アルマジロイマジン』がいた

「団長がお前、田障りだから遣せつてさ」

「アルマジロイマジンはアギトを指差しながら言ひ

「アギト、逃げてくれ」

「えつ・・・・ちゅうと待てよ、お前がやつあるんだよー!..」

「あいつを倒す・・変身」

『 Strike Form』

「お前のダンナは必ず助けに行くから・・今は逃げて!..」

「・・・・・管理局なんて大っ嫌いだけどよ、アンタは、アンタだけ
は別だ・・・・あたしも戦うぜ

『兄貴』!..』

そう言いながらアギトが幸太郎に近づく、そして・・・・・

『 Heat Form』

テディ不在

スバル「スバルと」

ティアナ「ティアナの」

2人「次回予告コ一ナー」

スバル「3人・・・帰つてこないね」

ティアナ「ま、そのうち帰つてくるでしょ」

スバル「いや、でもテディは幸太郎さん見つけるまで帰つてこないよ」

ティアナ「ん？」

スバル「どしたの、ティア？」

ティアナ「さつき一瞬電車みたいなのが見えたんだけど・・・」

スバル「こんなとこに電車が来るわけ無いじゃん、ティアつたら？」

ティアナ「そうよね」

新しい希望（前書き）

いつも感想を書いてくださる

卷之三

ねつがと'ハ'ヤニマナ...!

皆さんも是非感想どしどしお聞かせください。

要望はできるだけ取り入れますので
あと事情があつて今回、短いです・・・

新しい希望

『Heat Form』

NEWテンオウベルトから流れる音声と共にNEW電王にアギトのオーラをフリー・エネルギーに変換した鎧が現れる

燃え盛る炎のようなテンカメン

赤を基調としたボディに

肩から落ちるコウモリの羽のようなマント

NEW電王、ヒートフォームへと幸太郎の姿は変わった

「うわー...どうなってんだコレ...?」

アギトが驚愕の声を漏らす

「ユニゾンだつたつけ?電王の力つてイメージン以外でもつかえたんだ...」

NEW電王の中から幸太郎が感心したように言つ

「アギト! 体の主導権はお前だから頼んだぞ!」

「ええっ! ...ちょっと待つてくれよ兄貴!」

「こつまで! チヤ! チヤやつてんだあ! ...」

アルマジロイマジンがHN EW電王に拳を振るうが、HN EW電王はそれをすばやく避け、『デングガッシャーランスマード』を組み立てる

「アタシの怒りの一撃！！」

アギトの声と共に炎をまとったデングガッシャーがアルマジロイマジンを刺す

しかし・・・

「そんなしょぼい攻撃が効くかよ！」

イマジンの中でも防御力が高いアルマジロイマジンには効果が薄かつたが

「蒸し焼きだ！..」

そのまま「トンガツシャー」の先端に炎を集中させ、文字通りアルマジロイマジンを蒸し焼きにする

「熱つづつちよつちよつ熱い熱い熱い熱い聞いてないよこんのーーー！」

アルマジロイマジンは熱とのあまりココレテシマッタ

「兄貴、このまま決めるぜーー！」

HN EW電王はZN EWデングガッシャーランスマードを組み立てる
ダーパスをセタツチする

「おつりやああああああーーーーー」

そして、アルマジロイマジンはそのまま燃やされて灰になつた・・・

「で、さつきのなんだつたんだ兄貴？」

アギトが幸太郎に問う

「ああ、わざわざおめでたす。…………」

幸太郎が電王やフリー・エネルギーについて説明する

「なるほどねえ、ま、なんにせよこれからもよろしく頼むぜ兄貴」

ちなみにアギトは幸太郎を認めたらしく、彼を兄貴と呼び、ゼストを救うまで行動を共にすることになった

「で、これが『おじさん』だよ冗談?」

「アハだー。昔のところに迷ひなきやー。」

「アタシは正直冗談以外の局員などいひもいこけれど……冗談
がやつぱりなら……」

アギトは今ひとつ乗り気にはなかつた……

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

それから少し時間がたつた頃、フォワードメンバーはヴィータと謎の少女の捕獲に成功しており、少女を連行しようとしていたが、少女が不意に口を開いた

「逮捕はいいけど・・・大事なへりは、ほつておいていいの・・・?
あなたはまた、守れないかも」

ヴィータがその一言に過剰に反応した

「てめえええーーー！」

ヴィータが少女の胸倉を掴む

「ちょつ・・・ヴィータ隊長、落ちつ・・・」

「ひみせえーーー！」

スバルの言葉を一蹴するワイヤータ

その時・・・・

「エリオ君！後ろ！」

「え？」

ギンガがエリオに忠告すると同時に

「いただきつ

「うわっ！—」

エリオの足元から突然女性が現れ、ケースと少女を連れ去つていった・・・

一方その頃

「ヘヴィバ렐・・・・発動

シャマルと謎の少女を乗せたヘリに砲撃を撃つ準備がされていた

そして直撃した・・・・・

「どう？」の完璧な計画

紫の髪の少女に言葉を言わせていた本人・・・スカリエッティのナンバーズの4『クアットロ』は満足げに微笑んだ

「だまつて 今、命中確認中」

同じく砲撃を打った本人・・・スカリエッティのナンバーズの10『ディエチ』はうつとうしそうに言った

「あれ？まだ飛んでる・・・。」

砲撃が直撃したはずのヘリが飛んでいることに、驚愕の声を漏らす
ディエチ

「ん？」

ヘリの近くで誰かが何かを言つてゐることに気づいたディエチはその言葉を解析する

『俺、参上！！ 俺、最強！！』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「すまねえ、召喚師には逃げられてケースも奪われた・・・逃走経路も掴めねえ」

ヴィータが今回のことの報告していた、ヘリが無事だったことを聞いて落ち着いたようだ

「あの〜、ヴィータ副隊長・・・

スバルがおずおずとヴィータに話しかける

「なんだ!? 今報告中だ!」

「いや、実はレリック・・取られてないんですよ

「は?」

呆然とするヴィータ

スバルが言葉を続ける

「実はこんな時のためにレリックそのものに厳重封印をかけて別の所に保管しておいたんです」

「おー、じゃあレコックは？」

「敵に奪われる可能性が一番低い…………マ
チューーティの口の中です」

「…………」

今度はリイン?も一緒に呆然とするやつて……

「天丼をさがせえええええ…………」

『はい――――――――――』

新しい希望（後書き）

アギト「アギトと
テディ「テディの」
2人「次回予告」「——」
テディ「どちら様?」
アギト「いや、テメエこそ」
テディ「幸太郎、詳しく説明してくれ」
アギト「そうだよ兄貴、この珍獣は何なんだよ?」
幸太郎「次回、少女の正体判明」
2人「(無視された・・・。 orz)」

もう一人の電王（前書き）

次の連載は

仮面ライダー オーズに決定しましたああ！！

TV版がもう少し進んだら連載します

そしてブレイドが出てくる特別編はNEW電王の次のフォームが出たら発表します！

皆様、これからもよろしくお願いします

（作者の原動力は感想です、皆さん是非感想を送ってください）

もう一人の電王

「俺、参上ーー！俺、最強ーー！」

S H D E

シャマル

・・・私は今、困惑しています。

「ん？ 何ジロジロ見てんだ？」

私達が乗っているヘリに謎の砲撃が撃たれ、直撃すると思った瞬間。

幸太郎君の電王に少し似ている赤い電王が砲撃を防いでくれました

「あのー、もしかして幸太郎君の・・・

「何！？ お前幸太郎知ってるのか！？」

「えつと、一応彼の仲間というか協力者といつかなんですねけど」

「おお、そりやちよづこいじゃねえか。おい、良太郎」

赤い仮面の人・・・といふと呼ぶことにします

電王さんはさつきから独り言をブツブツと呟いています

「おこ、お前」

「は、はい！」

「俺達を幸太郎のところに連れてけ」

そう言いながら電王さんはベルトをはずそうとします

「あー次の攻撃が来るかもしれないんで、できればそのままでお願いします」

「ああ？ つたくめんじくせえな」

ヴィータちゃんと気が合いそうね・・・」の人

シャマル

SIDEOUT

「はあ・・・はあ・・・ヴィ、ヴィータ副隊長・・テディと幸太郎さん発見しました・・・」

走り回つて幸太郎とテディを探していたスバルが息を切らしながら

言つ

「よし、よべやった・・・・・・わあ、レリック吐け天丼!…」

ヴィータがティーティをブンブン揺らしながら乱暴に言つ

「ちょ、待つて・・他にイロイロな物まで出でつ…・・・・・・

ちなみに幸太郎は・・・・・

「幸太郎さん、この子どうしたんですか!?!?」

アギトのことで質問攻めにされていた(アギトは疲労により爆睡中)

ピーピーピー

ティーティがレリックとイロイロな物を吐き出した後、ヴィータに通信
が来ていた

「はい、こちらスタートーズ。ってシャマルか・・・え・・・うん・・
・何い!?!?」「

ヴィータの驚きように何かあったのかと心配するメンバー・・・・

そして、通信が終わり

「おい、幸太郎・・落ち着いて聞け・・・

「な、何・・・?」

「テメエのじいちゃんが来た」

四庫全書

理解にかかる時間 9秒

それで…じいちゃん何だ？

「ああ、『お前に話があるから来てくれ』って言ひてゐるらしい。はやで達も近くにいるから一緒に来てくれ

「あの、ヴィータ副隊長、私達も・・・」

ティアナがそこまで言つたところでヴィータが言葉を遮る

一
駄
目
だ
、
フ
オ
ワ
ー
ド
陣
は
六
課
に
戻
れ
、
分
か
つ
た
な
?」

「は、はい・・・」

その場にいるほとんどの全員がその姿に驚く・・・が

『つまつま...』

そう言いながら電王の中から赤いイマジン『モモタロス』が出で、
電王は『プラットフォーム』になる

「おひと、そういうやうだつた」

「じいちゃん、何で変身してんの?」

集合場所には幸太郎、テテイ、ヴィータ、シャマル、なのは、フヒ
イト、はやて、シグナム、そして電王がいた

「じいちゃん...」

「よお、幸太郎。元気そ'じやねえか」

「（ふつふつふつ、その程度のことではもうウチは驚かんで・・・幸太郎君が来てからこの程度なれたわ！－）」

約一名だけ笑顔だつた

そして次はP電王がベルトを取る
プラット

そして現れたのは14歳くらいの少年だった

叫んだのははやてだ

「だ、大丈夫ですか、主はやて？」

シグナムがはやてを心配しながら近寄る

「でも、幸太郎君がメツチャ強いじいちゃんや言つからウチは龜〇人みたいなんを想像してたのに、まだ子供やないか！――！」

ほやほのトシノン送モタロスである若手引く連せ上かっていた。

「でも、じにわやんじつ見えてもなのは達と同じ歳だぞ」

『うなづかれておはなをきく』

ପ୍ରକାଶିତ

全員、某ゆづくと同じ反応でした。

やがて全員落ち着いた頃

「えっと・・・野上良太郎です。幸太郎がお世話になつてます」

「時空管理局機動六課部隊長、八神はやてです。先程は失礼しました」

「ひつちは僕の契約イメージのモモタロスです。ほら、モモタロス挨拶しなきゃ」

良太郎が暇そくに寝転がっていたモモタロスを起こそうとする

「一度しか言わねえからしつかり聞けよ、俺はモモタロスだ！」

「すげえセンスだな」

ヴィータがモモタロスの姿を見ながらバカにしたように言う

ここから

ヴィータ VS モモタロス

第2回

『頭がアレな子』選手権！

と

良太郎が〇〇になつたことは言つまでもない。

「じゃあそろそろ真面目に話そつか・・・」

『（怒つてゐる！？）』

いい加減イライラしてきたなのはにより話が進むことになつた

「まず、僕たちがこの世界に来た理由だね」

「おい、幸太郎 おっさんから俺達は別件で動いてるって聞いたな？」

「うん、だからこの世界に紛れ込んだイメージは俺に頼むつて」

モモタロスの間に幸太郎は答える

「実は僕たちのバスの予備がまた盗まれたんだ！」

「バスとは幸太郎が変身するときに使うあのバスか？」

シグナムが良太郎に確認し、良太郎は頷く

「それで、俺達はバスを盗んだヤロウを探してたんだ」

「ネガタロスだろ」

「……知つてたの！？」

良太郎が幸太郎に詰め寄り、少しだじろぐ幸太郎

「」うちに俺もイマジンの情報を集めてたんだけど・・・やつばか・
・・・

幸太郎は今まで集めた情報から分析してみたが・・・最悪な予想が
当たつてしまつたことに落ち込む幸太郎

「でも、2人ともバスを持つてゐるんだつたら予備を奪われても問題ないんじやないですか？」

シャマルが良太郎に質問するが

「バスを持つてるのが普通の人ならね・・・でも、イマジンの目的は時間を壊すことなんです」

「・・・イマジンに時間を自由に越えさせたら、何でかすか分からんぢゅうわけか」

はやての答えにまたも黙つて頷く良太郎

「僕たちは幸太郎たちとは別のルートで情報を探してみるから何か分かつたら、また連絡してね」

「コレで、だる」

そう言いながら幸太郎は良太郎に手に持つていた物を見せる

それは・・・・・・

もう一人の魔王（後書き）

モモタロス「モモタロスと
テディ「テディの」

2人「次回予告」「ナーナー」

モモタロス「来たぜ、来たぜ、来たぜえ！ついに俺の出番だあ！！
テディ「そんなことより、今回で謎の少女の正体を明かせなかつた
こと全力で謝ります！！」

モモタロス「んな細けえ事、誰も気にしてるわけねえだろうが」
テディ「いや！！幸太郎が言つてしまつた以上責任がある！」
モモタロス「次回、俺の出番だけでクライマックス！！」
テディ「これ以上嘘をつかないでくれ！！」

子供（前書き）

前回、感想を書いてくれた

疫病神さん

門矢光さん

断空我さん

ポンチューさん

仮面ライダー・ディケイド神さん

ありがとうございました！！

これからも是非よろしくお願いしますーー！

感想お待ちします

子供

幸太郎が良太郎に会つた翌日

「幸太郎君、これから昨日の子のところに行くんだけど、一緒に行かない？」

なのはが幸太郎をとびっきりの笑顔で誘つていたが・・・

「ああん？ テメエ・・・兄貴に話し掛けたいんなら、まずアタシを通してからにしやがれ！」

アギトの妨害を受けていた（アギトの存在は幸太郎と本人の要望により、上層部には隠されている）

そう、アギトは昨日から幸太郎に近づく女性を24時間体制で脅して、誰も幸太郎に近づけないようにしてはいたのだ。だが・・・
「幸太郎君のことがあまり公にはされてないんだけど、そこにいるシスター・シャツハツて人には話してあるの」

なのはは完全に無視していた

「おい、コラ、無視すんじゃねえ！」

「俺は特に用事ないしいいけど、俺まで行く必要あるの？」

「そこのは気にしちゃ駄目なの」

「そ、そう・・・。」

「アタシは行かねーからなーーー。」

「・・・・なるほど。それで幸太郎までいるのか」

「うん。 ところでシグナム」

「何だ?」

「俺の呼び方變えた?」

「野上だと良太郎と區別しにくいからな。嫌なら元に戻すが?」

「いや、別にいいよ

現在、幸太郎、テディ、アギト、なのは、シグナムは昨日保護した子供の所へと向かっていた

「それより、すみませんシグナムさん。車出してもらつちゃつて」

なのはがシグナムについて来てもらつたことに謝つていた

「気にするな」

シグナムが言い終わると同時に通信が入つた

『騎士シグナム 聖王教会シャツハ・ヌエラです！すいません、こちらの不手際があつて・・・検査の合間にあの子が姿を消しました』

幸太郎たちが到着してすぐに通信をしてきた、シャツハがやつて来た

「申し訳ありません！…」

「状況はどうなつてますか？」

なのはがシャツハに訊ねる

「はい…。特別病棟とその周辺の封鎖と避難は済んでいます。今のところ飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません」

「外には出られないんだよな？」

今度は幸太郎が訊ねる

「ええ」

「じゃあ私と幸太郎君、シグナム副隊長とスター・シャツハとティちゃんで分かれて探ししましょう」

ちなみにここで自分と幸太郎をチョイスしたのはわざとだ

幸太郎となのはは裏庭の方を探しながら少し話をしていた

「人造生命体？」

「うん、人の手で造られた命・・・でも、生きてることには違いないの！…」

気づけばなのは自分でも驚くほどに強く言っていた

自分の親友のこともあって、幸太郎に人造生命体を否定されたくないのだ

そして、幸太郎の出した答えは・・・

「そんなのあたりまえじゃん。それより、早くあの子見つけないと」

全く『人造生命体』というものに抵抗がなく、変に過保護に扱うわけでもなく、ましてや化け物扱いすることもなく、ごく自然に一人の『人間』として扱つていた

なのはは一瞬、ハトが豆鉄砲をくらつたような表情になつたが、やがて笑顔になつた

「（・・・やつぱり、幸太郎君は運が悪くても、口が悪くても・・・
・優しくて、カッコイイの・・・）」

ガサツ

「ん？」

幸太郎たちが音のした方を向くとそこには昨日助けた少女がウサギの人形を持つて、怯えたようにコッチを見ていた

「何だ、こんな所にいたのか」

幸太郎が少女に近づいていく

その時・・・・

「逆巻け、ヴィンテルシャフト！」

「は？」

幸太郎が上を見るとシャツハが武器を持って降ってきた・・・幸太郎の上に

「あれ？・・・ああああつ！・・申し訳ございません！・・・」

シャツハがピクピク痙攣けいれんしている幸太郎を起こし、謝罪する

「大丈夫ですかあー！・・目を覚ましてください！」

野上幸太郎、享年17歳 死因『不幸』

少女はそれを見て涙目になってしまった

そして、後ろでコントしている一人を置いて、少女に近づく

「大丈夫?」「めんね、驚かせちゃって。私は高町なのはつていいます。お名前言える?」

「・・・ヴィヴィオ」

「かわいい名前だね、ヴィヴィオどこに行きたかったの?」

「ママ・・・いないの」

その言葉を聞き、一瞬悲しい顔をするなのは

「へえ~、それで自分で探そうとしたのか・・・結構根性あるじやん」

復活した幸太郎（若干ボロボロ）がヴィヴィオの頭をなでる

すると、泣きそだつたヴィヴィオがどんどん笑顔になつた

幸太郎が手を離す

ヴィヴィオ再び泣きそつになりながら、幸太郎の手を掴み自分の頭に乗せる

幸太郎なでる＝ヴィヴィオ笑顔

幸太郎離す＝ヴィヴィオ再び泣きそうになりながら、幸太郎の手を
掴み自分の頭に乗せる

2行、上に戻る。

しばらくして、フェイトとはやてから通信が入った

そこだ、はやてたちがモニターで見たのは

『うわああああん！……やだあ！……行っちゃやだあ！……』

なぜか若干ボロボロの幸太郎と困った表情のなのはと二人に抱きつきながら泣き叫ぶヴィヴィオと必死にそれをあやすフォワードメンバーだった

『おい、ティティ！……じいちゃんに連絡してリュウタロス呼べー』

『それならウラタロスの方が女性に強いんじゃないかな?』

『あいつは、駄目だ! 教育上、一番の有害物質だ!!』

『二人ともわけの分からないこと言つてないで、手伝つてください!』

ティアナに至つては若干、切れていた

「何なんや、この混沌・・・」

子供（後書き）

ヴィヴィオ「ヴィヴィオと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「——ナ——」

ヴィヴィオ「・・・怖い」

テディ「ガ——ーン」

アギト「このクソガキンチヨ！——兄貴になでてもらつてんじゃんね——！」

ヴィヴィオ「ひつ！」

テディ「ちょっと、やめてください！」

幸太郎「何、このカオス・・・」

降臨、満を持して…（前書き）

クリスマスに出かけたり、友達とWとオーズの映画見に行ってたりで更新遅れてごめんなさい

それと、前回感想を書いてくださった

皆大好さん

断空我さん

疫病神さん

門矢光さん

ポンチュー さん

ありがとうございました！！

これからもよろしくお願ひします！！

感想お待ちしております

降臨、満を持って!!

「降臨、満を持して……」

「本当に久しぶりだな、ついでにこの状況でわざわざ状況をややこしくするな」

幸太郎たちが必死にヴィヴィオをあやしていると、突然どこから沸いてきたのがジークがやって来た

「何を言ひーー! 我が兄弟のこともあつて私は子供の扱いが得意だ!」

「

「はいはい、ちょいぢいで」

もう完全に邪魔でしかなかつたジークを押しのけ、フェイト、はやてが部屋にやつて來た

「Hースオブエースと魔王にも勝てへん相手はあるもんやねえ」

「(フェイトちゃん、はやてちゃん、助けて〜)」

なのはが念話で一人に助けを求める

「ふつふつふつ、まあこにはフェイトちゃんに任しども」

「はやて、どうこう」とへつて、「ジークは本当に一体何がしたかったんだ?」

幸太郎が一つの疑問をぶつけるが、はやては黙つて笑うだけだ

そして、フエイトが泣き続いているヴィヴィオに近づく

「ここにちは、ここの子はあなたの友達？」

フエイトがヴィヴィオの落としたウサギの人形を拾いながら言つ

「ヴィヴィオ、こちらフエイトさん。なのはさんの大事なお友達」

なのはがフエイトを紹介する

「ヴィヴィオ、こちらジーク。バカの代名詞」

幸太郎がジークを罵倒する

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

「小僧、我が前にひれ伏せ」

フエイトとジークが続ける

「ヴィヴィオはなのはさん達と一緒にいたいの？」

「お前を我がお供その五に任命してしんぜよ！」

ヴィヴィオが答える

「……うん（フエイトの方だけを見て）」

フェイドとバカが再び話しかける

「でも、なのはさんと幸太郎、大事な」用でお出かけしなくちゃいけないの」

「ふむ、なかなか見所がある。家臣一同……」の小僧を見習つが良い……」

「もういいから黙れ。」

上の二言は誰が言ったか分からぬが、全員の共通意識だ
「ほり、ヴィヴィオがわがまま言つから困っちゃつてゐよ、」の子
も」

フェイドがウサギのぬいぐるみをヴィヴィオに見せる

「ヴィヴィオはなのはさんを困らせたいわけじゃないんだよね」

「……うん」

ヴィヴィオが一人を放す

ヘリで幸太郎、なのは、フォイト、はやは聖王教会と呼ばれる場所に向かつていた

「で、なんで俺まで？」

「これから向かうところは幸太郎君にも関係あるからや」

「じゃあ、管理局と敵対関係だったアギトはともかくテディは駄目なの？」

「いや……だって……多分、つかまるで、門番に」

「…………」

まあ、普通ならそうである

到 着

・・・・・すいません、遊び心です

ハシコン

「えいごぞ」

「失礼します」

「高町なのは一等空尉であります」

「ファイト・T・ハラオウン執務官です」

「降臨、今日は出番だつ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「「「何やつてんの――――――」」

降臨、満を持って---（後書き）

シャマル「シャマルと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「一ナーハー」

テディ「なぜジークばかり・・・・・・」

シャマル「ジークちゃんの存在が最近忘れられがちだからからから」

テディ「いつかきっと・・・私も・・・」

シャマル「それを言うなら私だって（ニコラ）」

テディ「リインさんと私とシャマルさんで組織でも作りますか？」

予言（前書き）

前回感想を書いてくださった

断空我さん

疫病神さん

輝さん

皆大好さん

ありがとうございました！！

これからもよろしくお願ひします！！

感想お待ちしています

予言

「改めて、聖王教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します」

「野上幸太郎」

カリムと幸太郎が自己紹介をする

ジーク？幸太郎が窓から捨てたよ

「どうぞ、座つてください」

カリムが幸太郎たちを座るように促す

「よいしょっと」

「失礼します」

「クロノ提督、少しお久しふりです」

幸太郎は超が付くほど気楽に、逆になのは達は超が付くほど堅苦しく座った

「ああ、フェイト執務官」

クロノと呼ばれた男性もなんか堅苦しい

「うふふつ、お一人ともそう堅くならずに。私達は個人的にも友人だから、いつもどおりで平氣よ」

カリムは笑顔で告げる

「と、騎士カリムが仰せだ」

「じゃあ、クロノ君久しぶり」

「お兄ちゃん、元気だつた?」

「兄弟いたの!?」

幸太郎が驚いていたがフェイトは冷静に答えた

「義理の、だけどね」

しばらく談笑が続く

「さて、それじゃあここからが本題や。まず、イマジンとガジェットの関係・・・イマジンの専門家の幸太郎君に今回の件についての意見を言つてもうります」

全員が幸太郎の方を見る

「まず、間違いなくイマジンはガジェットを作つたやつ・・・スカラエッティだつけ? そつと手を組んでる」

「根拠は?」

普段はテンライナーメンバーと同じレベルのはやてでも今回は眞面目だ

「アギトの話だと、敵のボスはネガタロスつて言つイマジンなんだ。これはじいちゃんも調べたことだから確実だ。そいつはじいちゃん達が一度倒したんだ・・・でも、生きてた」

「良太郎に対する復讐つて事?」

フュイトが幸太郎に問う

「うん。しかもそいつはじいちゃんから盗んだバスを持つてるから時間を自由に越えられる

それで、仲間をどんどん集めていくんだ」

「時間を自由に・・・スカリエッティが飛びつきやつやな

「なるほど、確かにそうなると今までのことも考へると奴らは手を組んでいると考えられるな」

クロノは腕を組んで難しそうな顔をする

「どうしたのクロノ君？」

なのはがクロノの様子に疑問を覚える

クロノはなのはの疑問に答える

「六課設立の表向きの理由はロストロギア『レリック』の対策と、独立性の高い少數部隊の実験例。知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフェイトの母親で上官。リングディ・ハラオウンだ。それに加えて非公式ではあるが、彼の三提督も設立を認め、協力の約束もしている」

「え？」「？」

「？」

なのは達は驚いているが、正直幸太郎はその人たちがどれほどえらいのかよく分からないので一人だけ取り残された気分だ

「その理由は私の能力と関係があります」

「私の能力『プロフューティン・シリフテン』これは最短で半年、最長で数年先の未来。それを詩文形式で書き出した予言書の作成を行なうことができます。二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんからページの作成は年に一度しかできません。しかも、命中率はよくあたる占い程度です」

「（テネブとかティアたりが好きそつだな、そういうの）」

普通なら驚くところだろうが、常識が通じないことが常識のMr.^{ミスター}チャーハンことオーナーよりかはよっぽど常識的なので幸太郎はあまり驚かなかつた

カリムが予言の内容を語り

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地。死せる王の元、聖地より彼の翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船も焼け落ちる」

「まさか……」

「それって……」

「……」

なのは、フロイトは予言の意味が分かり、若干ふざけ氣味だつた幸太郎も黙つて聞いた

「ロストロゴニアをきっかけに始まる管理局地上本部の壊滅と。そして管理局システムの崩壊……でも、まだ続きがるんです」

「時守^{ときもり}の元に集いし魂。黒き野望を碎き、時守も散る……」

「時守つて……まさか……」

なのはがはやてを見る

「うん、うちらは多分、良太郎君か幸太郎君と思つたる……でも、良太郎君はすでにこの世界から離れてる、つまり……」

はやてはそこから先を言つことができなかつた……

なのはが幸太郎に好意を持つてゐるのは簡単に分かる

『散る』と言つ言葉が指す意味も……

予言（後書き）

ザフィーラ「ザフィーラと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「ナーナー」

テディ「何かシリアスになつてしましましたが、次回からはほのぼのギャグがしばらく続きます！！」

ザフィーラ「・・・・・」

テディ「どうかしましたか？ザフィーラさん？」

ザフィーラ「いや・・・・（さりげなく初めての出番じゃないか？）」

「

ママとパパと紫の龍（前書き）

前回感想を書いてくださいました

疫病神さん

ポンチローさん

断空我さん

いつもありがとうございます!!

これからもがんばるのでよろしくお願いします!!

感想お待ちしてます

ママとパパと紫の籠

「ただいま」

カリムの予言を聞き、なんとなく思い雰囲気になっていた幸太郎たちだが、いつまでも俯いていては皆に心配をかけるといつことで明るく振舞つていた

そして、幸太郎となのは、フェイトはヴィヴィオとテディ、アギトのいる部屋へとやって来た

「ただいま」

「ただいま」

「ただいま」

3人がそれぞれ挨拶をすると案の定、ヴィヴィオがとんでもない速さでやつて來た

「よつ、ヴィヴィ・・・・がつ・・・・!・」

幸太郎に飛びつこうとした瞬間、バランスを崩したヴィヴィオの頭が幸太郎のストライクゾーンに直撃。

結果、幸太郎は大切な何かを失う・・・

「幸太郎! おい、幸太郎! !」

「え？ そこってそんなに痛いのか？」

大量の脂汗を垂らしながら、静かに、アソコを抑えてうずくまる幸太郎を見て、テティはマジで心配し、アギトは幸太郎がふざけているのかと思っていたので驚いていた

「……ああーー早速予言が当たったよーどうしてこうしたやつらがいたんだ？」

なのはもかつて無いあわてふりを見せてくるが

「（もうこれ放つておいていいかな？）」

この場で唯一、まともな思考ができる大人フロイトの活躍によつてこの場は納められたのは別の話・・・

「とにかく、ヴィヴィオ相談なんだぞね？」

「うそ

なのはは、ヴィヴィオに自分がしばらぐ代のママになるところにとできただけ簡単に、ヴィヴィオに説明した

「ママ？」

「ママ。ママだよ

「パパ？」

「え？いや、俺はちが……」

「そりゃ。パパだよ／＼！」

「おい！…」

なぜかなのばがママ、幸太郎がパパ、ヴィヴィオが娘と言つフアミリーができてしまった

「・・・せめて、お兄ちゃんで頼む・・」

幸太郎がそう言つと再びヴィヴィオが泣きそうになつたので結局パパになつたという・・・

「わ～～い！パパ！」

SIDE

幸太郎

「しかし、どうするんだ幸太郎・・・これでは良太郎は『ひいじいちゃん』になつてしまつぞ」

テディが果てしなくどうでもいいことを心配していたが、無視！！

「兄貴、兄貴！…だつたらアタシは兄貴の側近な！」

アギトはアギトでトン違いな事を言つていたが、これも無視…！

問題なのは…・・・

「うふふ、アハ 幸太郎君がパパで、私がママ…・・・うふふふ」

なんなんだ！？「コイツは！？

「くそっ、フェイトは呆れてどつかに行つたし…・・・どうすればいいんだ・・！」

「幸太郎・・・あきらめたら、そこが終点だ・・・」

殺すぞ

俺が本気で悩んでいると、不意に紫の影が一瞬見えた

そこで俺の意識は途切れた・・・

幸太郎

S I D E O U T

「幸太郎・・・くん・・・？」

やつと理性を取り戻したなのはが幸太郎が急に倒れたかと思つと一瞬で起き上がつたことを不審に思つていると・・・

「わ～、やつぱり「ツチの方が動きやすいやーー。」

と、ビニからか出した帽子をかぶりながら幸太郎?が言つた

そして、ティティのほうを見て・・・

「あーーー！青い熊ちゃんだ！久じぶりーー

と言ひ出した

ママとパパと紫の龍（後書き）

良太郎「良太郎と
テディ「テディの」
2人「次回予告」「ナーナー」
テディ「なぜ彼を？」
良太郎「あ～、ちょっと伝えて欲しいことがあつたんだけど・・・」
「
テディ「完全に忘れてますね、アレ」
良太郎「思い出してもらえたらいいんだけど・・・」

答えは聞いてない…（前書き）

申し訳ござりません…！

感想を書いてくださった方に返信をしようとして間違えて感想を消してしまいました！

感想を書いてくださった方がコレを見てくれば光栄です

「ゴーストライマジンは出る予定です…！」

それと、前回感想を書いてくださった

疫病神さん
断空我さん
皆大好さん
キラさん

私のせいで感想を消してしまつた方

ありがとうございました…！

これからもよろしくお願いします…！
感想お待ちしています

答えは聞いてない！！

「それで、なぜここに？・・・リュウタロス」

テディ^{リュウタロス}がR^{リュウタロス}幸太郎に問う

なのは達も状況を理解するために黙っている

「え～っと、たしか良太郎に何か頼まれてたんだけど・・・ま、いいや」

『いいのかよ！』

思わずツッコミを入れたことは誰にも責められないだらつ

「そんなことより君、僕と遊ばない？」

「つえつ？」

R^{リュウタロス}幸太郎に指差されたヴィヴィオがたじろぐ

「え・・あ・・で、でも・・・」

「答えは聞いてない！」

「わ～～！」

R^{リュウタロス}幸太郎は、ヴィヴィオを抱いで逃げていった・・・

『…………』

なのはが通信機を取り出す

「もしもし、はやてちやん？？？私達の温かい家庭（予定）を壊すイメージが出たの・・・うん。だから射殺許可いいかな？」

「何、物騒なことを言つてるんですかーー？」

テディの渾身のシックルを無視してなのはが走り去つていった

ちなみにアギト（はせ）は恐怖のあまりじしまりへ動けなかつた
ところ

一方その頃……

「ねえねえ、何して遊ぶ？答へば聞かないけど。」

「ふええーー？」

リュウタロス

リュウタロス

なのはによるR幸太郎捕獲作戦が出されていることも露知らず、R幸太郎はヴィヴィオを連れて逃げていた

しかし、曲がり道を曲がったところでスバルが待ち構えていた

「あ～～！！ティア！いたよ、ヴィヴィオと幸太郎さんだ！」

そして、ワンテンポ遅れてティアナもやつてくる

「動かないで！あなたが何もしなければ私たちも危害を加えないから」

ティアナがR幸太郎に言つが

「ねえ、お姉ちゃんたちも一緒に遊ぼうよー。」

と言つ一言に

「「は？」」

となるしかなかつた・・・

「……なのほちやん、どうこうとかな？」

「ひひへへ、『めんなさい』……」

はやての笑顔だけど威圧たっぷりの表情を前になのはは謝ることしかできなかつた

まあ、リュウタロス捕獲のためになのはは起動六課にかつて無いほど恐怖を与えたのに、結果が

『実は味方でした～』

では済まないだろう

結局、リュウタロスはヴィヴィオ、フォワードの面々と遊ぶことで満足し、幸太郎から出て行つた

「まあ、それはともかく、じいちゃんからの用事で来たんだろ？」

幸太郎に一言により、寝転がつて絵を描いていたリュウタロスが立ち上がりつて話を始める

「うん。良太郎がコレを幸太郎に渡してつて」

リュウタロスはクシャクシャになつた茶袋を幸太郎に渡す

その中に入つていたのは

「…………お年玉だ」

『…………』

「…………それだけ？」

全員が唖然とする中、出番の少ないエリオが代表して聞く
「そう……みたい……だな……でも、なんでわざわざリュウタ
ロスに？」

幸太郎がリュウタロスに問う

「えーー、だつて亀ちゃんはナンパするし、熊ちゃんは冬眠中だし
」

ちなみに、モモタロスの事を言い忘れたのはわざとだ

「じゃ、僕かえるからね、バイバイ！」

「あっ、ちょい！！」

はやはまだリュウタロスに聞きたいことがあったので引きとめよ
うとしたがすでにどこかへと行っていた……

「（何で良太郎君が直接来んかったんや？）

はやての疑問は残つたままだった……

ちなみに

「お年玉?」

「はい! 良太郎ちゃんは幸太郎ちゃんのおじいちゃんなんですから、ちゃんとあげないとダメですよ~」

「でも、僕は今、アツチに行けないし···」

「だったら僕が行く!』

「えつー! ちょっと、リュウタロス! ···!』

「待ちなさい、リュウタ! ···!』

「行つてきま~す!』

なんてことがあったのは幸太郎は知らない

答えは聞いてない……（後書き）

リュウタロス「リュウタロスと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「——ナ——」

リュウタロス「青い熊ちゃん、鳥さんどー?」

テディ「(そ)ういえば、幸太郎が捨てたつて言つてたよ(うな)・・・」

リュウタロス「ねえ、ねえつてば!」

テディ「ジークは星になつた」

リュウタロス「ほんと!?.鳥さんす"じ"!」

テディ「次回は番外編です」

番外編 幸太郎の一日

SHIDE

幸太郎

俺の一田は朝起きて、テディとアギトに挨拶する」とから始まる

「・・・おはよう、テディ、アギト」

「おはよう、幸太郎。よく眠れたか?」

「あ～～～・・・ணண」

テディは起きて当然だな、アギトの一度寝もいつものことだ

「パパ～～～！」

「よひ、元氣そうだな」

朝から忙しいなのはと違つて、俺は基本任務がない時は暇だからヴィオの相手が最近の日課だな

「テメ～・・・兄貴になれなれしいんだよ・・あん?」

「アギトさん～～～！」

アギトはいつも、ヴィヴィオを脅す。何でだ？

テディはアギトと兄妹的な関係だから、それを落ち着かせるのが仕事だな

「幸太郎く―――ん！―――」

奴が飛んできた！？回避！
なのは

・・・失敗

「どうしたの、幸太郎君？」

「だから危ないから滑空しながら、こいつち来るなって―――」

「幸太郎君なら大丈夫だよ！ヴィヴィオ、パパとママがそろったよ

」

「わ～～～ママーーーー！」

・・・ああ。初めて会つた時はもつともな子だと思つてたのに

何がなのはを変えたんだ？

「幸太郎！見つけたぞ！今日はヒートフォームで戦つてもいいぞ！」

今度はシグナムか・・・

ま、アレはただのバトルマニアってことかな

「おっしゃーーー！やつてやるうぜ兄貴ーー！」

お前もどつから来た・・・？

俺はNEWデンオウベルトを腰に巻いて赤いボタンを押す（黄色は
ワイングフォーム、青色はストライクフォームに戻る）

『Heat Form』

「やつと解放された・・・」

俺は別に戦うのが好きでもないのに・・・が、強いけどね。俺
今日も勝ったし

「・・・おつかれさま、幸太郎。風呂が沸いてるぞ・・・・・

「テテイはいつゆう所で気が利いてこる。やつぱお前は最高のパートナーだ

「ありがとな。じゃ、俺は風呂に行つてくるから

「・・・いやーやっぱり私にはできない! やめるんだ、幸太郎!」

「!

「は? 何でだよ? お前・・・・変だぞ」

俺は若干逃げるよつて風呂に行つた

俺が風呂に行くと・・・・

「よつ、兄貴。遅かつたな

アギト・・・まあ、コイツはこいや

「パパ〜〜

ヴィヴィオ・・・許容範囲だ・・

「幸太郎君?

誰かは言つまでもないよな・・・!

!

パンツ一丁で逃げてきた俺はテディの元に行き・・・

映画の約五倍の形相と声でティーデイの胸倉を掴む

「幸太郎、だから忠告したんだ……いや、したんです。脅されていたんです。申し訳ござりませんでした……」

かって無い俺の形相にひるんだテテイかしいも以上に丁寧な敬語を
使う

パンツはまだ脱いでなかつたし、見えてないだらうな？（二つち
は向こうを見てないぞ！！）

なんとか無事に入浴、食事を終えたらなのはも流石に何もしてこない

いいな
平和のために戦うヒーロー物とかバカにしてたけど・・・平和つて

幸太郎

SIDEOUT

SIDE
フェイト

「それじゃあ、幸太郎まだ気づいてないの？」

私はルームメイトのなのはの相談に乗っています

「うん・・・。幸太郎君って鈍感なのかな？」

なのはの素行にもかゝなり問題あると思つたけど・・・

「何か言った？」

「うん、何も言つてないよ・・・」

「うん、どうすれば気づいてもらえるのかな？」

「告白は？」

私は提案してみますが・・

「ふええ！それは恥ずかしいよ・・・」

あんなに行動力あるのに！？

どうやら、幸太郎がなのはの気持ちに気づくにはもう少し時間がかかる

フェイア

SIDEOUT

暗躍する影（前書き）

前回と番外編と短編で感想を書いてくださった

ブラッキンさん

門矢光さん

ポンチューさん

紅さん

ラハールさん

三龍さん

疫病神さん

断空我さん

たぬえもんさん

キラさん

まことに多くの感想ありがとうございましたーー！

これからもよろしくお願ひしますーー！

感想お待ちしています

リュウタロスの来訪から数日たつたある日……

アイツは何がしたかったんだろう?

まあ、それはさておき

現在、幸太郎はヴィヴィオと散歩中だった……理由は番外編を見てもらえれば分かります

「……つまり、この前の紫の奴は俺のじいちゃんの仲間だ」

幸太郎はヴィヴィオにリュウタロスのことを説明していた。普通は気になるものだろう

「……おじいちゃん?」

だが、ヴィヴィオの興味はリュウタロスではなく『じいちゃん』だつた……

「ああ、俺のじいちゃんで『野上良太郎』って言う人だ。ヴィヴィオにどうては一応ひいじいちゃんか?」

「その兄貴のじーちゃんつて一度来たらしいけど、アタシは寝てだから会つてないんだよな~」

アギトも良太郎には興味があるようだ

「とても優しくて、それでいてとてもしつかりした方ですよ」

テディは良太郎を若干美化している氣もあるが、あながち間違いでもないだろう

「後は、おばやし……愛理さんと侑斗さんくらいかな?」

言い直したのは、彼が幼い頃に飲まされた『特別ジューク』という名の化学兵器が関係しているかどうかは不明だ……

「(そういうえば、ハナさんもじいちゃんも愛理さんも俺も特異点なんだよな……野上家つて特異点生まれやすいのかな?)」

幸太郎がそんなことを考えていると……

「幸太郎くーーん、ヴィヴィオーーー!ーー!ーー!ーー!ーー!ーー!

なのはがやつて來た

「あ・・・・

ヴィヴィオはほとんどじずっと一緒にいる幸太郎には氣兼ねなく話せるようだが、なのはにはなつこいでいるが若干緊張するようだ

「朝♪はんこれからだよね?一緒に食べよつー」

なのはがヴィヴィオを抱っこしながら言つ

朝食後、なのは、スバルはデスクワーク。フェイト、エリオ、キャロ、ギンガは任務、はやて、ティアナもクラウディアに出かけた・・・

「それで、俺の仕事はヴィヴィオのお世話か・・・俺が機動六課に入る必要あつたと思う?」

幸太郎はヤケクソ気味にティディに問う

「しかし、幸太郎はこここの文字が読めないからデスクワークは出来ないし・・・私達の存在は極秘だから下手に任務へ出すわけにも行かないし・・仕方ないだろう」

ティディは幸太郎を落ち着かせようとすると、幸太郎はブラックなオーラを出したままだ・・・

「よし、せつかくだし・・・『アレ』試すか?」

「……『アレ』は幸太郎の負担が大きいからやめた方がいい。
・・・」

「？・・何だよ『アレ』つて？」

「？？」

アギトが問う、ヴィヴィオも頭に?マークが浮かんでいる

「俺達の本当のカウントダウン・・・でいいのか?」

「？？？」

やつぱりよく分かっていないようだが、コレについては後日、説明することになり、結局幸太郎は丸一日、ヴィヴィオとアギトの遊び相手をすることになった・・・

「・・・おい、犬と猿あと、鳥ー」

暗い謎の場所で黒いイマジン・・・ネガタロスが3体の部下を呼ぶ
それに反応して犬のようなシルエットのイマジンと猿・・・といつ
かほとんど『リラ』のようなイマジンがやつてくる

「お呼びですか、ボス？」

「ボクウになんか用？ガガガガ！」

犬のようなイマジン『ドッグイマジン』と『リラ』みたいだけど一応
猿のイマジン『モンキーイマジン』がそれぞれ用件を尋ねる

「おい、鳥はどうだ？あと、お前、それキモイからやめりつて言つ
たわうが！！」

もう一匹の部下の所在を聞きながら、ネガタロスはモンキーイマジ
ンの奇妙な笑い方にツッコム

「奴なら、ボスから器をもらひてからずつと奇妙な笑い声を上げて
飛んでいます。」

「アーッは・・・・・・」

ネガタロスは呆れたような、怒ったような声を上げる

「器なんか上げたのが間違いだよー・どうせならボクウが使ったのに
ガガガガ！！」

「あの器、何といいましたつけ？」

「ゼストだー・ゼ・ス・ト！－なかなか使えそうな器だつづのに・
・！」

シャーリー「シャーリーと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「——ナ——」

テディ「段々、出番少ない人のための場所になつてきましたね。こ

こ」

シャーリー「でも、ヴァイス陸曹なんて作者の都合で存在を抹消されたくないですよ?」

テディ「恐ろしい……」

番外編 ヒーローショー

「・・・さて、今回幸太郎君を呼んだのは他でもない…任務や…」

「本当、はやて!?

幸太郎は待ちわびていた任務に思わず身を乗り出していた

最近はヴィヴィオと遊ぶか、シグナムと運動するかぐらうしかして
なかつたので、当然だろう

「それで、任務の内容とは?」

ハイテンションな幸太郎に代わってティテイがはやてに問う

「ヒーローショー!..!..!

「「「「「「「「「は?」」」」」」」」」

「ヒーローショー!..!..!

「ヒーロー・・・兄貴にぴったりの任務じゃねえか!..!..!

アギトは知らないのであるう…中の人の恥辱を

「・・・いろいろといいたいことはあるけど、それ、六課の任務
じゃないよな?..!..!

幸太郎の問いにはやはては悪びれも無く

「いやー、知り合いがやるはずやつたんやけど、全員腹壊してもてな。ほら、いま流行のノロウイルス。それで、勢いでついつい・・・

はやての話を聞いて、無言でNEWデンオウベルトを巻く幸太郎

「ティ、カウントは3だ」

3
秒後

「はい、すいません。調子に乗りすぎました。もう絶対にこんな勝手なことは致しません。… フォワードの皆様も協力してくれるとの事で… 詳しいことはそちらにお任せします…」

すっかり卑屈になった。部隊長Hを置いて幸太郎はフオワード陣のもとに向かつた

「あ、幸太郎さん……」つちで——す……」

食堂にて、大量の料理を食べながら打ち合わせをしているメンバーがいた

エリオとキャロはなんかあの歳で『あきらめ』を覚えている。ティアナは頭を抱えて嘆いていた

「クソ^{はやて}狸の話だと、詳しい設定とかはこつちで決めるらしいな?」

キャロが答える

「はい。五人組の戦隊物みたいなんですけど…隊の名前すら決まってないみたいで…」

「戦隊……ライダーがやつちや駄目でしょ。それ

幸太郎は何かの電波をキャッチしたようだ

「はい、はーい！…だつたら、食物戦隊 タベルンジャーなんてどう？」

「どうや顔で言われても反応に困るわ。」

「じゃあ、環境戦隊 マモルンジャーなんてどうですか？」

「スバルよりマシ。ただそれだけ。」

ティアナの判定は厳しかった・・・

結局、一時間の会議で

『時間戦隊 テンレンジャー』

とこう奇跡と呼ぶにふさわしい名前になつた。

（おまけ）

「次は隊員の色ですね。これも設定は全くありません

エリオが苦々しい表情で言つ

「「」は無難に髪の色でいいんじゃない？」

ティアナの意見通り、各自の名前が決まった

幸太郎＝テンレンジヤーブラック

ヒリオ＝テンレンジヤーレッド

キヤロ＝テンレンジヤーピンク

スバル テンレンジヤーロイヤルパープルバイオ
レット

ティア＝テンレンジヤーオレンジ

「よし、決定。」

「いやいやいやいやいやいやいやいや……なんなんですか私の名前！……？」

「ぐ、だつてスバルの髪の毛の色つてややこじりゃん」

「パープルじや駄目なんですか！？」

れつもまだあんなにはしゃいでいたスバルが本気の反論をしていた

「似合つてますよ、ロイヤルパープルバイオレットっ！」

ヒリオの言葉に悪氣は無かつた。だからタチが悪かつた……

「次はストーリーだよね」

キヤロの行動も悪氣は無かつた。それゆえにスバルは〇一二になつた・・・・

「テディがエキストラAを襲つて、それを倒す。でいいんじやない？」

ティアナの意見はまたしても簡単に通つた。

そして、本番・・・・・・

はやて、フェイト、なのは、アギト（幸太郎以上に極秘のため参加できず）、ヴィヴィオ、その他の隊長陣は部下達の活躍を見に来ていた

テデイ「ふはははは！悪い子はいねが～～～～！」

「キストラ「さやあああ――――――！」

やつている」とはアホみたいなのに、テディの姿と演技力は子供を
びびらせるには十分だつた

幸太郎「そこまでだ。怪人テ・ヅイー！」

ティ「なんだ貴様らは！？」

黒い衣装に身を包んだ幸太郎と他のメンバーが現れる

幸太郎「」の黒さは運の悪さを表している
ツクー！」

……そこには、『耐える男』という芸術があつたといふ。・・・・・

ティア「レッドとの微妙な違い」
テンレンジヤー「レンジー」

日文の讀法と書法

スバル「（ええつと…私つてなんて名乗るんだつけ…ええつと…・・・

スバルが名乗る出番が来る

スバル「えっ、あつ…燃え上がるやる気

「……！」

全員「・・・・!?

ティア「（バカスバル！－何やつてんのよ！？）」

キヤロ「（ああつー・レッドの座を追われたエリオ君が混乱しています！？）」

幸太郎「（しかも、燃え上がるやる気つて何だよ！新人の漫画家か！？）

スバル「（・・・・・ごめん、エリオ）」

一方、社会的地位を奪われたエリオは何と名乗るかを人間の限界を超えた速さで考えていた

エリオ「（えっと、色、色、色！－なにか僕の・・あ、そうだ、もう裏切つて怪人にならうかな？）」

その時・・・

テディ「隙あり――!――！」

これ以上ないほど全力で油断してたエリオにテディが攻撃をする

だが、この時のテディはエリオには救いの神に見えたという

全員「（ナイス、テディ！）」

キャロ「ああっ！仲間がやられた――！」

幸太郎「許さないぞ、テ・ヴィー！」

テディ「かかつてぐるがいい！愚かな人間が！」

結局、エリオは名乗つている最中に倒されるというレジェンドを残した伝説の隊員という役に変更され、エリオ抜きでショーンは進んだといづら。

「僕、何か悪いことしましたか？」
b y幸太郎の不幸が伝染した少年

模擬戦戦争（前書き）

前回と番外編で感想を書いてくださった

疫病神さん

ブラッキンさん

断空我さん

霞 翼斗さん

ありがとうございました！

これからもよろしくお願いします！！

感想お待ちしています

「今日は皆にお知らせがあります。陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が今日からしばらく六課に出向となります」

なのはがフォワードのメンバーに仕事口調で告げると、スバルと同じ髪の色をした女性が挨拶をする

「108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願ひします。

」

「　　はー。」「　」

挨拶が終わったところで、ギンガが

「ところで、なのはさん、幸太郎君はどうしますか？」

となのはに問う

「幸太郎君は今は私の娘のパパとしてがんばってるよ

本当にコイツは…。

事情を知っている者意外でこんなことを言われたら誤解するのは当然だらう…

ギンガも苦笑いをするしかなかつた

「そうだ、せつかくだし、今日の訓練には幸太郎にも参加してもら

つたらどうだ?」

シグナムが提案するが、実は自分が戦いたいだけだ
「確かに…今思えば幸太郎さんと模擬戦した事つてありませんよね
?」

と、言うわけで

幸太郎 参戦決定

「話は分かったけど…なんどよりによつてなのはよに迎えに来をせる
んだよ!?」

幸太郎がキレ気味に言つ

「お、落ち着け幸太郎!」

「うるさい。アンタにいきなり寝込みを襲われそうになつた俺の気
持ちが分かんの?」

「あんまりイライラするとハゲるぞ。」

シグナムの男に対しては最強の脅しに一度黙る幸太郎

幸太郎の突然の参戦により

隊長4人組ＶＳフォワード五人+NEW電王で模擬戦をすることになつたのだが

「せっかく幸太郎君も入ってくれるんだし、罰ゲームをつけない？幸太郎君を倒した人は一日幸太郎君を自由に出来るとか？」

というなのはの悪魔の提案（幸太郎限定）が入ってしまった為、絶対に負けるわけにはいかなくなつっていた

「絶対に勝つぞ！命をすり減らしても勝つんだ！！」

「じゃあ犯つてみよウカ！」

幸太郎の心からの叫びと、なほの何かアブナイ発言で戦いの火蓋は切つて落とされた

幸太郎がNEWデンオウベルトを巻くと周りにミコージックホールンが流れる

「変身！…」

『Strike Form』

『セットアップ！…』

Set Up

「うあおおおおおおおおおおおおおお…-----！」

文字通り、全力全開で一番の危険分子であるなのはに切りかかる幸
太郎

普段の彼はクールです

ちなみに、フェイトはエリオとキャラ、ヴィータはスバルとギンガ、
シグナムはティアナと交戦中だ

「何があつてもお前だけは倒すぞ！」

「幸太郎君が相手でも今回だけは譲れないよつ！」

お互ひ、すでに人間の限界などとつぶに超えていっているのだが、そんな
ことは露知らず戦つ二人

2時間後

フォワードは一人も隊長を倒すことなく全滅していた

近くにたまたまいたジークを無理やり協力させ、ウイニングフォーム（体の主導権は幸太郎が奪い取った）でなんとかヴィータの撃墜に成功

騒ぎを聞きつけたアギトの協力により、ヒートフォームでシグナムも撃破

隊長一人を倒すという偉業を成し遂げたが、やはり限界が近づいてきていた

「幸太郎君、どこー？」

ストライクフォームに戻ったNEW魔王は愛剣 マチエーテディで草陰からなのはを打ち落とそうとしていた

もうヒーローの戦い方ではありませんね

「テディ、いけそつか？」

「距離が少し足りないな……撃つた直後に仕掛けた方がいい」

「分かつた」

そして、NEW魔王はなのはを撃つ……が

「なのは～」ひつひつもいな…「わああーー！」

よつこよつてソーサクムーブでやつて来たフロイトに直撃。

「・・・・・あ。」「

そして・・・・・

「勝者 高町なのはーー！」

幸太郎が絶望に、ゴールインした・・・・・

乍著「乍著」

テディ「テディの上

卷之二十一

作者「あひの田あべがほと」

「」とあるからだよ。テ・ヅイー君

テテ・伝うたじこと

連載しようかなあと

ティ「オーズの予定を立てておきながらですか!？」

卷二

テニスイ「ハセモー！」

作者 そこで、影山か

ティ「まんまですね」

作者一 うるせいよ。と「かく多くのタイトル応募待つてます!!」

クライマックスの裏側とカウントダウンの覚悟 前編（前書き）

前回感想を書いてくださった

断空我さん

霞 穂斗さん

疫病神さん

プラッキンさん

門矢光さん

仮面ライダー＝ディケイド神さん

ありがとうございました！
感想お待ちしています！

クライマックスの襲来とカウントダウンの覚悟 前編

「お出かけ？」

「うん。お出かけなの」

なのはとの模擬戦に敗北した幸太郎は、一体どんなことをされるのかを心配し、一秒が何十年にすら感じていた。そして、なのはからの命令が遂に来た

「ヴィヴィオも連れて三人でどこかでお出かけしようよ」

「…え？」

予想外

読者の皆様も拍子抜けしちゃう

「俺に拒否権は無いからいいけど…なんでお出かけ？」

「ヴィヴィオが来てからお休みもあんまりないし。ヴィヴィオを連れてどこかにお出かけしたいな～って思つてたの そうだ…この前新しく出来た『デパート』なんてどうかな？」

「う…うん…」

『命拾い』

今、幸太郎にもうともこ念の言葉だらつ

「パパ～、ママ～！」

またちょいどいいタインングでやつてくるヴィヴィオ
しかし

「うや」

「あ、こけた」

二人を見つけたのがよほどうれしかったのか、思いつきり転ぶヴィ
ヴィオ

そして、ぼうかん傍観きめ込んで助ける氣の無い親代わり一人

しかも、一人以外は全員、医務室に旅に出ていた

「ヴィヴィオ、大丈夫？怪我していないよね？がんばって自分で立つ
てみようか」

なのはが優しい口調で数メートル先のヴィヴィオに言つ

「パパ…ママ…」

ヴィヴィオは泣く寸前だったが必死に涙をこらえていた

「俺達はここにいるぞ。ちゃんと自分の足で立つんだ」

幸太郎も決して意地悪で助けないのではなく、なんでもかんでも甘やかすのが良くない事はＴＶのドキュメンタリーとかでなんとなく分かっていたので助けなかつたのだ

しかし

「大丈夫ですかーーー？」

ちょっとと離れた所からやつて来たティディがヴィヴィオを起こしてしまふ

「痛むところはありますか？ 息苦しかったり、寒気がしたりは？」

「…空氣読めよ」

ティディ、今回の出番終了

「でも、買い物って言つても今何か必要なものとかあるの？」

朝食の時間はとっくに過ぎてしまったため、昼食を食べながら問う

幸太郎

「ううん。必要なものは無いよ……でも、新しく出来たデパートだから人は多いし、もしかしたら本物の家族だと思われたりして」

本音ボロリ

幸太郎は18歳未満なのでアレは出来ないので、周りから『子持ち新婚カップル』と認識させる事こそが真の狙いだつたりする

「じゃあ、早速行こ」うか

「オッケー」

「うん！」

ヴィヴィオは始めて一人と出かけるのがうれしいようだ

？？？

「おい、犬」

「何で『ゼロ』まじょう、ボス？」

謎の場所でネガタロスが部下のイマジン、『ドッグイマジン』を呼びつけていた

ドッグイマジンは静かに腕を組んでいる

「電王…いや、新しい電王だからNEW電王とでも言つが…まあ、何でもいいか。…がこの地図の場所にいる。前座のクセして田障りになってきたからな…そろそろ消しとけ」

ネガタロスがドッグイマジンに地図を投げる

「かまいませんが…」こだと他の人間も適当に殺すかもしませんが、よろしくですか？」

ドッグイマジンは極めて冷静に言つ

人が殺すことなど彼にとっては蚊を殺すこととなんら変わりないので

「今更いちいち当然の事を聞くんじゃないよ…いいからそれと行け」

「了解」

一方、デパートではヴィヴィオの服、なのはのウイングウショッピングなどで幸太郎たちは時間を過ごしていた

すぐ近くにある殺氣に気がつくなどなく…

クライマックスの襲来とカウントダウンの覚悟 前編（後書き）

ネガタロス「ネガタロスと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「——ナ——」

テディ「ところで、あなたはどうして生きているんですか?」

ネガタロス「いきなり核心を突くんじゃねえ!まあ……キバと電王、ゼロノスの攻撃を食らって、ネガデンライナーが消滅した時に飛び降りて今まで時間の中をさまよつてたんだがな」

テディ「それで次に現実世界に来たら別の時空だつたと……?」

ネガタロス「そういうことになるな」

テディ「一応設定はあつたんですね……」

クライマックスの裏側とカウントタウンの覚悟 後編（前書き）

前回感想を書いてくださいました

疫病神さん

霞 穂斗さん

仮面ライダー「ディケイド」さん

断空我さん

ブラッキンさん

ありがとうございました！！

これからもよろしくお願いします！！

感想お待ちしております！

クライマックスの襲来とカウントダウンの覚悟 後編

「なのは、次はどこに行くの?」

大体のところを回ったので、幸太郎が疲れ気味に言つ

「そうだね……うーん」

なのはあまり思いつかないので、ヴィヴィオに意見を求めよつとした

その時……

「魔王ですね?」

「…………」

不意に掛けられた声に表情を変える一人

「お前は……?」

「申し遅れました。ワタクシ、ネガタロス軍団(仮)の幹部をやらせていただいています。『シャス』と申す者です」

かぶつっていたフードを脱ぎ、狼とアヌビスが混ざったような黒い姿を見せるドッグイマジン……シャス

「ひつ……」

ヴィヴィオがその姿を見て怯える

「シャス…？ なんで、俺がここにいることが…？」

幸太郎がここにいることはせいぜい機動六課の面々しか知らないはずなのに

シャスが幸太郎の居場所を知っている事に疑問を覚える幸太郎

「そんなことは簡単ですよ。もつとも、教えるわけにはいきませんがね」

「それで？ わざわざ」挨拶に来たつてワケじゃないんだろう？」

幸太郎は挑発とも取れる小バカにした口調でシャスに問い合わせながら、ベルトを構える

「話が早くて助かります。貴方のような前座につぶさちよられでは迷惑といつことで、ワタクシが貴方の抹殺を命じられました。」

「…………」

幸太郎は呆然としていた。

ネガタロスが自分を狙つてくることは予想できていたが、自分を殺しに来たというこの相手からはまったく殺意のようなものを感じないのだ

「幸太郎君…」

なのはは心配そうに幸太郎を見つめる

「ああ、そつそう、一般人を避難させるなら早くした方がいいですよ。このテパートの各所に爆弾を仕掛け置きましたから。あと……ちょうど10分で爆発ですね。」

まるで、電車が来ることを告げる車掌のような冷静な口調でシャス
が言つ

「な……！」

「もつとも……信じるかどうかは貴方達の自由ですが」

「（「コイツ……ハッタリで言つてゐんじゃない……？）なのはー早く
皆を避難させてー！」

幸太郎はNEDENオウベルトにバスをセタッチする

「変身！」

『Strike Form』

「幸太郎君は！？」

「俺は「コイツを倒してから行く……俺の強さは知つてるでしょ？」

「……分かったよ……必ず後から来てねー信じてるから」

本当なら、ここで幸太郎と共に戦いたかったが、そういうワケには
いかない……

なのははヴィヴィオを連れて、六課に連絡しながら店員に事情を伝

える

シャスにジトンガツシャーの刀身を向けるＺＥＷ電王

「ふむ。確かに少しあはれるよひですが、所詮は子供のお遊戯ですね」

「あー、もう蝶らなべていーよ。じつせ雑魚でしょ、お前?」

ＺＥＷ電王はあくまで余裕の態度を崩さずにシャスに挑む

わざわざ爆弾のことを口から話したのは自分を混乱させる為だと
思ったからだ

「貴方のツレの女のせいで、一般人はこのフロアからほとんどいなくなつたことですし、思いつきつかつて来くるところですよ」

「言わねなくてもっ！」

シャスの懷に飛び込み、下から切り上げようとするNEW電王
しかし…

「遅いですね」

「なつ…！」

NEW電王が剣を振りきった頃にはすでに、NEW電王の視界から
シャスは消えていた

NEW電王の後ろに回つてんだシャスがNEW電王を後ろから何か
で切りつける

「がつ…！」

苦悶の声を漏らすNEW電王。

「実戦でコレを使うのは久しぶりですね。私の愛鎌『アビスラッシュ
ヤー』です」

そう言いながら、手に持っていた犬を連想させる鎌を見せるシャス

「クソッ！」

だが、NEW電王はそんなことま気にも留めず、シャスに向つ一度切
りかかる

「だから遅すぎるんですよ」

再び、まるで瞬間移動でも使ったかのよつた速さでNEW魔王の後ろに回りこむシャス

「ふん……」

シャスに後ろから思い切り突き飛ばされ、婦人服売り場に突っ込むNEW魔王

「（「いや…はや）」

「考え事をしているヒマがあるんですか？」

「なつ！」

アビスマラッシャーで何度も何度も切りつけられるNEW魔王

変身も解け、意識も朦朧としていた

「予想以上にあつけなかつたですね」

生身の幸太郎の首にシャスがアビスマラッシャーを向けた

その時…

『悪いけど、それ以上はさせないよ……』

「 「 ……」

そこには立っていたのは…

4体のイマジンのオーラを一挙にフリー エネルギーに変換した電王

体の各部に備えられた4つの『テンカメン

胸のターンブレストと全身の『デンレール

電王クライマックスフォームだった

「じいちゃん…」

「ほつ…貴方が電王ですか…ちょ、うど、こ、まとめて始末してあげますよつ…！」

シャス^{クライマックス}が『電王^{クライマックス}』に高速移動して、アビスラッシュジャーで左肩をきりつける『が』

「痛いがなつ…」

「…へ？」

聞こえてきたのはなんともマヌケな声で、しかも『電王^{クライマックス}はダメージを受けた様子はない

「オラア…！」

そのままの体制で、C電王がシャスの顔面を思いつきり殴る
クライマックス

もろに不意打ちだつたのもあつて数メートル吹つ飛ぶシャス

「く、ク、ザマーロー……それよつて、ふんやられたみてえじゃねえか? オフ、立てるか?」

わざわざシャスに悪態をついてから、幸太郎に手を差し伸べる(電
王...) クライマックス

「モモタロス……何でここに……！？」

幸太郎は、電王の手を借りて立ち上がりながら驚愕交じりの声で言つた。間に合つてよかつた……

電王の中から良太郎の声が聞こえる

「オーナーって本当に何者なんだよ…？」

• • • • • • • •

その問い合わせに答えるものはいなかつた……

「それよりも、アイツ逃げちゃったナダリーの？逃がした魚がもう一度釣れるとは限らないよ」

『電王の右肩のイメージ』…ウラタロスが呆れたように言つ
タライマックス

「やつだ…！」アイシはここに爆弾を仕掛けていったはずなんだ！
早くここから出ないと…」

「なんやでー？卑怯な奴やなー！」

今度はC電王の左肩のイマジン…キンタロスが怒声交じりに叫びつ
彼は正々堂々とたたくことが主義なので、こういった無関係な人間
を巻き込むのが気に食わないのだ

C電王に拘^{クライマックス}がれて逃げる時に幸太郎は思つた…

あれだけ大口たたいといて、簡単に負けた…

今回はじこちやんが助けてくれたけど…

あとほんの少しオーナーが氣づくのが遅かつたら俺は死んでた…

なのは後に後で行くなんて約束しておきながら…

結局、俺はあの時からなんも成長してないじやんか…

じこちやんの手伝いくらいしか今の俺には出来ない…

だつたら…

『アレ』を使ってボロ雑巾みたいになつた方がまだマシだ…！

クライマックスの裏側とカウントダウンの覚悟 後編（後書き）

オーナー「オーナーと
テディ「て、テディの…」

2人「次回予告「オーナー」」

オーナー「なにやら大変な」となったようですねえ、アレクサン

ドロビッチ君？」

テディ「は、はい…（この人、本編に出てないのに何でいるんだ！
？…あ、私もか。」

オーナー「次回は番外編ですが、決してお見逃しのなによう！」

番外編 幸太郎捕獲大作戦 前編（前書き）

龍騎の映画を見て、マジ泣きして

555の映画を見て、嗚咽がとまらなくなつて…

カブトの映画を見て、鼻水が止まらなくなつて…

水分が足りない、今日この頃…

なのはは現在、六課のいつものメンバーと食事をしていた
そして、不意になのはが口を開く

「ねえ…今日は朝から幸太郎君を見かけないんだけど、皆何か知ら
ないかな？」

ビクッ！

スバル、フェイト、ヴィータがなのはの言葉に震える

「いやつ！知らないですよ！本当に！幸太郎さんどこだらうな～？」

（言えない…絶対に言えない…）

スバルがわざとらしく周りをキヨロキヨロと見回す

「た、多分、トイレじゃないかな～？」

（言つたら…幸太郎は確実に殺られる…）

フェイトまでもが白々しく周りを見渡す

「そ、それよりも、早く食おーぜ！メシが冷めちまう…」

（幸太郎…逃げる…！）

ヴィータも脂汗を流しながら対応する

「やつか……じゃあ、後で探そうかな？」

『（マズイッ……早くアイツを何とかしないと……）』

3人がキレイに同じ事を考えた…

そつ

『（幸太郎が朝から六課の女を手当たりしだいナンパしてゐるなんて
……バレたら幸太郎が殺される……）』

今朝のこと

「あつ、おはよつ幸太郎」

「幸太郎さんおはよつ」やこまーす」

「よひ、幸太郎」

部隊舎の中で偶然出会ったスバル、フュイト、ヴィータは通りかかつた幸太郎に挨拶をした

しかし…

「…………ああつーすいません…あなた達があまりにも美しくて、つい見とれていました…」

「…え?」

いきなり幸太郎が自分達を口説いてきたのだ

「よろしければ、僕と釣りに行きませんか?…愛といつ魚を捕まえるための釣りを…」

「おい、頭でも打つたのかよ…キモチワリイダ…」

幸太郎から2、3歩引くヴィータ…

「幸太郎…なのはどいうものがありながら…」

フェイトが幸太郎に非難の目を向ける

なのはと幸太郎は恋人ではありません

加害者 被害者
なのはと幸太郎です

「ちょっと…心が揺れかけたけど、なのはさんが怖いんで遠慮します！」

スバルは深く考えずに普通に対応していた

…「」の段階では

「ボソッ…（「」の女性はなかなか簡単には釣れないな…）」

幸太郎が何か小さく呟いたが、3人がソレに気づくことはなかつた…

そして、今度はまた別の女性がそこに通りかかる

幸太郎はその女性の方を向き

「あの…僕と少しお話をしませんか？あつ、「めんなさい…急にこんなこと言われても迷惑ですよね…故郷に残した姉に似ていたもので…つい」

「（あれ…？幸太郎さん一人つ子つて言つてなかつたつけ…？）」

スバルもさすがに異変に気づいたようだ

そして、幸太郎はその女性にもつ何回か言葉を掛けると

手をとつて楽しそうに歩いていったのだ…

「おい…スバル…」

「なんですか…ヴィータ隊長?」

「…」

「…かもしだせん」

「…」

フェイトにいたつては口が開いたまま、思考停止していた

「（幸太郎のこと）に關しては、なのはの心は『閉鎖』と『開放』の一_二択しかねえからな…氣を付けねーと…」

「「」うのそつをまでした。じゃあ、なのはわんはちよつと幸太郎君を探してくるね」

ガタッ！

スバルが勢いよく席を立つ

「なのはさん！少し教えてもらいたいことがー。」

「ふえ？な、なにかな？」

スバルの尋常じやない様子にたじろぐなのは

「うーじゅなんなので、アッチでー。」

スバルがなのはの腕を掴み連れて行く

「よくやつたスバル…！今のうちに…おい、みんな聞いてくれ！」

呆気にとられていた他のメンバーにヴィータとフェイドが今朝のことを説明する

「それはまた……なんて命知らずな……」

ティアナが幸太郎に黙祷をささげる

「でも……なにかおかしくありませんか？」

元デングレンジャー・レッドは幸太郎の変わりよつに疑問を覚える

「うん。 それは私達も気づいてる……多分、リュウタロスのときと同じ、良太郎のイメージんじゃないかな？ ほら、前にリュウタロスが『えーー、だつて亀ちゃんはナンパするし、熊ちゃんは冬眠中だし』

つて言つてたし……」

「亀ちゃん……か」

シグナムが若干呆れながら相槌を打つ

「とにかく、早く幸太郎さんを見つけないと……！」

キヤロは幸太郎の『周囲からの信用と命』のために、幸太郎の捜索に出かけた

「私達も手分けして探し

フェイトの提案に頷き、それぞれ幸太郎を探しに行くメンバー

しかし、彼女達は知らなかつた…

これから起ころる、究極の奇跡を…

番外編 幸太郎捕獲大作戦 後編

SIDE
フェイト

「幸太郎———ど?——?」

皆さん、こんにちは。フェイト・T・ハラオウンです

私は今、亀ちゃん(仮)に憑依された幸太郎を探しています……

もし、なのはが幸太郎(の体)がナンパしているところを見つけたら……

……
機動六課はお終いだ……

いや、それもあるけど、それ以上になのはは悲しむだらつ……

友達が悲しむところなんて見たくない……！

早く、亀ちゃん(仮)を見つけて、事情を説明しないと……！

そう思いながら、曲がり角を曲がる

「……」

そこで、私は見てしまった……

奇跡を…

「本当に今日の幸太郎君はお上手なんだから～。とにかくで欲しい物とかある?」

「欲しいもの…愛かな」

なのはが釣られてる…

ある意味、助かつたけど…

これはこれでなのはが怒るんじゃ…?

「……じゃつ、また後でね」

話が終わって、幸太郎(亀)はどこかへ去つてこきます

なのははピンク色のオーラを出しながら、見送っています…

「な、なのは…?」

「あ、フエイトちゃん!あのね…!」

そこから、なのはは小一時間使って、幸太郎と両思いになつた喜びを伝えてくれました…

恋は眞田つて本当ですね

でも…ちゃんと教えなくちゃいけないよね

「なのは……落ち着いて聞いてくれる……？」

「じつしたのフロイドちゃん」

「じつは……あの幸太郎は……」

そこから、なのはに全てを教えました……

そして、彼女の導き出した答えは……

「……あ、もしもし。はやくけやん？あのね……リミッター解除ともみ消す準備、いいかな？」

なにを！？

悲しんでこる様子は無くて良かったですが、その分、亀ちゃん（こ愁傷様）に怒りが行っているようです……

一応、良太郎のイマジンなんですよ、亀ちゃん？

「じゃあ幸太郎君を使って、私を騙した悪い子にお仕置きしに逝こうか」

私は今、どんな反応を求められているのでしょうか？

お仕置き……ティアナの時より瞳が素敵になってるね、なのは？

「た、確かにあんまり褒められる事はないけど……一応、良太郎のイマジンだしね、ね？」

「お義爺ちゃんのイメージでも、やつて良い事と悪い事があるのを教えるだけだよ」

「シシ」「ミは読者さんに任せます。疲れました。

『なのは隊長！野上幸太郎を発見しました！エリアD4で鼻歌を歌いながら携帯端末をいじっていますが、どういたしますか？』

「オッケー……ゼクトル13部隊はそのまま待機ね、私が直接行くよ」

機動六課にかつて無いチームワークと謎の部隊が編成されています

⋮

ゼクトル＝

『ゼンタイ

『ク』ルシイ思いをしている

『T』クベツ部隊の

ルーパー達

今はまだ、亀ちゃんにせひして危険を伝えるかだけを考えています

でも、そんな私の想いとは裏腹に、なのははバリアジャケットを開けて

龜ちゃんのいるHariaに向かっていきます

「おい、幸太郎君」

「あつ、なのはよりやん。もしかして、僕に…」

非殺傷設定のはず。非殺傷設定のはず。非殺傷設定のはず。

だから、撃つても大丈夫なんだ、きっと！

「危なつ！！」

龜離脫。

「……ん？ 俺が……確か……って、つやかめのままであるのかな？」

•
•
L

…あ

「いやー、『ごめんね』。ほら、良太郎の今のサイズじゃ女性は釣れないしさ。仕方なかつたんだよ」

「おい、コイツ反省してないみたいだぞ…おかげで時間と貴重な人員一人が散つたのによ」

ヴィータが『ウラタロス』に懇々しげに言つ…

「まあ……悪気は無かつたみたいだし……やれやれ許してあげようよ」

私はゼクトル総勢28名となるのは、フォワード、隊長に囲まれているウラタロスがさすがにかわいそうになってしまった…

「はいはー。ちょっと通してなー」

「あ、はやい」

ゼクトルの監を翻つて、はやでがウラタロスの前に立つ

「で、ウラタロス、本当の用事はなんやつたんや?」

…え?

「いやくら良太郎君でも、さすがにナンパせらるためだけに君を送つたとは思へへん…なにかあつたんか?」

はやでの言葉に、ウラタロスは感心したよつにはやでを見る

「へえ……意外と鋭いね?でも、僕もただで教えるのは…」

「構え」

ガチャ

…ゼクトルの監がいつせいにデバイスを構える

「スマセン、今の暴言は海に流していただけます?」

「ええよ。じゃあ用件聞かせてくれるかな？」

「うひゃり、奴さん^{やつさん}が本氣で僕達を潰しにかかつてきたみたいでね、幸太郎にははやく『アレ』を身に着けるために、僕が鍛えてあげようと思つたんだけど……」

嘘だ……絶対に嘘だ……

だって、心なしか顔がにやけて見えるよ？

本音はナンパするために良太郎を置いてくるめたみたいだ…

でも……敵が本氣で幸太郎たちを倒す気だつて言つた時は、マジメに見えた…

もしかして……私達が知らないことひどいとビビん戦いは進んでる？

番外編 幸太郎捕獲大作戦 後編（後書き）

ずいぶん前から、やるといつて大長編がやっと公開できそうです！！

なので、ここで予告をしみつと思します

合わせ鏡が無限の世界を形作るよし、現実における運命も一つではない・・・・・

それは、誰かの言葉

同じ物語でも選択の違い一つで物語は二つに増える・・・・

その選択の違いが増えれば増えるほど世界は変化していく・・・

しかし、ほんの少しの運命で物語は簡単に交わる・・・

今ここに、3つの物語が交錯した世界が生まれる・・

特別大長編

仮面ライダーNEW電王×リリカルなのは Strikers +
strikeform

THE・LAST・BLADE

「電王だ！…電王だ！…コイツ殺せばいっきに幹部だぞーーー！」

「幸太郎さんのおかげでイマジンへの対処もできてますし、本当に幸太郎さんがこの世界に来てくれて良かったです！」

「違う」

「俺は剣崎一真…またの名を、仮面ライダーブレイド…！」

「パパ…いなくなっちゃうの……！？」

「幸太郎、私には誰が正しいかは分からぬ。しかし、何があつても私は幸太郎の味方だ」

「いぐぞ、テディ、アギト、ジーク、一緒に戦ってくれ！」

『私は出番があればそれでよい』

カウントダウンへの下準備（前書き）

更新遅れてすいませんでした！

前回感想を書いてくださいました

皆大好さん
超人類さん
霞 空斗さん
断空我さん
ブラッキンさん
ボンチューさん
仮面ライダー＝ディケイドさん

ありがとうございました！！

これからもよろしくお願いします！！

カウントタウンへの下準備

SIDE

幸太郎

『やつぱり俺達、最つゝ高のコンビだな！』

『ああ！最高だ！！』

…そうだ、あの日…

『これからもずっと一緒にやっていけそうだな』

あの日、俺は大切なものを一度失った…

大切な相棒の体が光の粒子になつて消えていく…

『…テデイ』

俺の相棒…テデイが消えていくのを黙つてみてている事しか出来ない…

『……幸太郎。私は、自分で自分の行き先を決めたのは…実は今度が初めてだ』

テデイは言葉を続ける

『気分のいいものだな』

『……ああ……だから……消えるな……消えるなよテディー……』

テディイが消える……それを認めたくなかった

『……幸太郎……コレを』

テディイが何かを取り出す

それは星の装飾がされたお守り……

『多分、私の代わりにお前を不運から守ってくれる』

俺がそれを受け取ろうとした瞬間……

サアアアアアア……

……テディイは『時間』から消滅した……

俺はその場にひざを付きながら、テディイの残してくれたお守りをとる

『……バカ……これ縁結びじゃないか……お前がドジるなんて初めて見た……』

お守りを握り締める……

そして、じいちゃんが前にそうしたみたいに

消えたテディイの粒子を携帯電話の形にする……

じいちゃんにセンスないって言つたけど……

俺もセンスないよ……

本当に……

「ハツ！」

俺は……寝てたのか……？

「！――目が覚めたのか幸太郎！――？」

「……テ、ディ」

「幸太郎君……よかつた……」

「…なのは」

「兄貴！ケガは大丈夫なのかよ！兄貴…安心してくれ、兄貴の敵はあたしがとるからな！」

「…アギト」

それ、結局俺が戦つてないか？

「パパ――――！」

ドスツ！

「つ――ヴィ…ヴィオ…」

寝起きに、小さい子供の突進は効いた…

そうだ…俺はシャスに負けて…

そうだ、爆弾は！？

「テディ！爆弾は！？」

「…私達が戦っていた階が爆発…負傷者は出なかつたが、結構大きなニュースになつている…」

「…じいちゃんは？」

なのはがその質問に答える

「良太郎君は今、はやてちやんと話をしているよ」

「アンタ……兄貴が運ばれてきた時はこの世の終わりみたいな顔してたくせに……意外と冷静だな」

アギトが感心したよ'ひごまわ'

「なつー。」

なのはがなんか赤面してる

仲間を心配するのは恥ずかしい事じゃないぞ？

でも、今はそんな事を気にしてる場合じやなかつた…

「……テディ、アギト……あとジークもいたほうが良いな、後でちよつといいか？」

「くつ？あたしはもうろくな良いけどよ。どうしたんだ兄貴？」

「幸太郎……使うんだな『アレ』を…」

テディがどこか悲しみを込めた声で言つ

「『アレ』？前も言つてたけど、なんなんだ、それ？」

「……じいちゃんが固体のイマジンを同時に憑依させるみたいに、俺もこのケータロスでテディとアギト、あとジークを同時に憑依させられるんだ…」

俺をポケットからケータロスを取り出してアギトに見せる

「だが、良太郎のようにイマジンを憑依させる戦い方ではない幸太郎が無理やり3体も憑依すると…本来なら4人で分担するはずの負担がいっきに幸太郎に押し寄せる」

つまり…

「それって…幸太郎君がとつても危ないって事…？」

そういうことだ

「パパ…？」

ヴィヴィオはよく話が分かつてないけど、なにかを感じ取ったみたいで、俺にくつついたまま離れない

「冗談だろ、兄貴！あたしはそんなことしないからなー！」

アギトはどこかへ飛んでいこうとする…でも

「頼む…！」

俺は迷い無くアギトに頭を下げる

「兄貴…でも…分かった…あたしは兄貴を信じる」

アギトは今ひとつ煮え切らないみたいだけど、渋々了承してくれた

幸太郎

SIDE OUT

「ネガタロスの動きについて分かつてるのはこれくらいです」

「やつか…幸太郎君のこともあるのに呼び出して『めんな…』

「いや…皆が迷惑をかけてますし…」

はやてと良太郎は今、部隊長室でお互いの情報を交換していた
とあるイメージン4体によつて六課が結構な被害を受けているので、
良太郎は少し縮こまつっていた

「それにしても……シャス……なかなか面倒な相手が出てきたもんやな

……」

はやてがため息を小さくついていると

「じいちゃん、居る！？」

幸太郎が勢いよく、部隊長室に飛び込んできた

傍らには、テディ、アギト、ジーク、捕らえられたイマジン4体が居た

「お久しぶりです」

「アンタが兄貴のじいちゃんか！……あれ？小さくねえ？」

「久しぶりだ、我が友よ！」

「ちっくしょー、幸太郎！俺はプリン食つのに忙しいんだよ！離せ
「ラーメン」

「適当な男の人に憑依して女性を釣つてたのに……まさか僕が捕られ
るんてね……」

「NNNNN」

「僕は遊びたいの！離してよ、幸太郎！」

「…………幸太郎？」

良太郎もこのシユール極まる状況にはさすがに少し困惑していた

そして、幸太郎が口を開く

「じいちゃん、クライマックスフォームで俺と戦ってくれ。俺も力
ウントダウンフォームを使つから」

カウントダウンへの下準備（後書き）

キンタロス「キンタロスと」

テディ「テディの」

2人「次回予告」「一ナーハー」

テディ「遂に分かった『アレ』の正体、それは主人公の特権、最強フォームでした！」

キンタロス「ズズズズズズ」

テディ「あの〜、もう少し反応してくれても…」

キンタロス「ん？…おお、天井は出番あつてよかつたな」

テディ「…………」

別の『時間』の来訪者（前書き）

今回、霞 穂斗さんの『時間を駆ける魔王』とクロスします！

前回感想を書いてくださった

ブラッキンさん
超人類さん
霞 穂斗さん
疫病神さん
断空我さん
矢部野 和麻田さん

ありがとうございました！

別の『時間』の来訪者

「幸太郎…カウントダウンフォームって…もしかして…アレを使うつもりなの…？」

良太郎は幸太郎に驚愕を含んだ視線を向ける…

近くにいるイマジンとアギトの事は完全に頭から抜け落ちているようだ

「うん。そりや、急には扱いきれないかもしねないけど…少しでも力が欲しいんだ」

そういつた幸太郎の目には迷いはなかった

「でも…アレは…」

「いいじゃねえか、良太郎」

良太郎が反論をしようとしたところで、モモタロスが口を挟む

周りにいるイマジンたちもモモタロスを止めようとせざ、彼の言葉に耳を傾けていた

モモタロスは言葉を続ける

「どうちにしる、このままじゃジリ貧なんだ。幸太郎にやる気があるんだつたら好きにわせてやれよ」

ぶつきら棒で、憎まれ口。でも、それは彼が人と付き合つのが苦手なだけで

長い時間一緒に戦ってきた良太郎にはその言葉に隠された彼なりのやさしさを理解していた

しかし、良太郎はまだ納得しきれないようだ

「……ヒーヒー、さつきから放置されてるウチはどうしたらいいんや？」

某部隊長が何か言つたらしいが、誰にも聞こえていなかつた

「…分かつたよ。でも、危なくなつたら止めるよ」

「うん！」

結局、良太郎は渋々ながらも了解し、訓練に付き合つことにしたようだ

話がまとまつたところで、部隊長室を出て行くメンバー

「……結局何やつたんや……？」

「「」の場所の使用許可もらつてきたよ、幸太郎君」

「ああ、ありがとうな。なのは」

「じゃあ、はじめようか」

さつきからいかにもめんどくさそうにしているモモタロス

話を聞いて、様子を見に来たフォワードと隊長陣を口説くウラタロス

爆睡しているキンタロス

エリオを操つて無理やり躍らせているリュウタロス

このイマジン4体の前に、良太郎が立ち、ケータロスの3・6・9・#のボタンを押す

「みんな、行くよー」

『モモ・ウラ・キン・リュウ』

「全員集合ークライマックスだぜー！」

モモタロスの合図と共に良太郎に憑依していく4体のイマジンたち

あたりに『コージックホーンが響く

『Climax Form』

良太郎が電王の鎧に包まれていく

ソードフォームの桃の皮が剥けた様なデンカメン

両肩と胸に装備されるそれぞれのフォームのデンカメン

C電王^{クライマックス}へとその姿は変わる

「あれが…良太郎さん…幸太郎さんのおじいちゃん…！」

「かつこいい…！」

「エリオ…センス大丈夫？」

「でも、なんだか強そうですね」

「ちょっとキモくねえ？」

「そんなこと言っちゃ駄目だよ、ヴィータちゃん」

「後で私も手合させ願いたいものだな」

「とにかく、良太郎の要素は…」

「あれ？今の状況が理解できないのウチだけ？」

○電王をみて、二者二様の感想を漏らすメンバー

「うひつと待てー・5番田のチビー・キモイつて言つた――――――！」

「ああ……？誰がチビだつて……！」

幸太郎より先にヴィータが電王と拳で語り合っているが、そんなことはどーでもいい

「それじゃあ……俺達もこへどー・ナゲイ、アギトー…………お、おじジ
ーク」

「負担があればすぐに言つんだぞ」

「兄貴とならざ」までも！」

「ところで、今のはなんだ？ 今のは？」

幸太郎も藍色のケータロスを取り出し、3・6・9・#のボタンを押す

『コウ・テティ・ジーク・アギト』

ケータロスをターミナルバツクルへセットし、ライダー・パスをセタツチさせる幸太郎

Count Down Form

幸太郎にフリー・エネルギーの鎧が装備される…その瞬間

「ぐうひ……あああひ…あああーー！」

幸太郎の周りに集まっていた鎧が砕け散り
幸太郎はそのときの衝撃で吹っ飛ばされる

「幸太郎！」

「兄貴！？」

幸太郎の体から弾き飛ばされたティーディとアギト、他のメンバー達も
幸太郎に近寄っていく

「…………」

幸太郎は何も答えない…

「幸太郎君つ！幸太郎君つてば！」

なのはが幸太郎の頬をペチペチと叩くが反応がない

気を失っているようだ…

「…チャンス」

なのはが目を閉じて、ゆっくり幸太郎の顔と自分の唇を近づけて

「つて、ええええええええーーちょっと何してるんですかーー？」

だが、我が孫のピンチに僕等の野上良太郎がなのはと幸太郎を引き

離す

さすがに、C電王の状態の良太郎の力に敵うはずもなく、簡単に引き離されるなのは

しかも、その後にアギトがなのはに威嚇をし続けたため、手を出せなくなってしまう

「……きっと幸太郎は、良太郎に感謝するだろくな…」

誰かが言つた言葉に、その場の全員が、うん、と頷いていた

なのはが拗ねたように頬を膨らませていたのは別の話。

「それはそうと、シャマルに連絡した方が良いか？」

「はい。お願ひします。シグナム」

SIDE

幸太郎

：失敗か

吹っ飛ばされる瞬間にそう思った

やっぱ、急に強くなるうなんて無理な話か…

「幸太郎君つ！幸太郎君つてば…」

…なのはの声が聞こえる

でも、意識はあるのに体が動かない

まあ、今はこのままでも良いか…

「…チャンス」

今すぐ起きないと…！

ヤバイ…しかも、最近のなのはの奇行を止めてくれる奴はいないし

…！

なのはの顔が近づいてくるのが分かる…

ヴィヴィオに悪影響が出たらどうするんだよ…

「どうか、何がどうなつて、こうなつた!?」

じいちゃんがなのはを引き離してくれたのか
なのはがまた襲つてくる『配はない』

ありがとうございます

今ほどじいちゃんに感謝した事はないよ

でも、俺は何で起きられないんだ？

「ああ、そんなに深く思えなさいよ」かっこいいも？

誰だ？

今の声は聞き覚えがない……

誰かいるのか？

お前は？

俺は皇ソウヤ。お前と同じ、NEW電王だ。

別の『時間』の来訪者（後書き）

ソウヤ「ソウヤと
テディ「テディの」

2人「次回予告」「——ナ——」

テディ「わざわざ」足劳ありがと「」ぞこます。ソウヤさん

ソウヤ「…なんかテディに敬語使われるのは気持ち悪いな…」

テディ「霞 空斗さんの『時間を駆ける魔王』をからのゲスト出演

ですね」

ソウヤ「ああ、やつちもよろしくな

番外編 テート前半戦（前書き）

現在、ネタ切れ中です・・・

ネタをくれる方！！

どうか感想に送ってくださいーーーーー

番外編 デート前半戦

「じゃ、じゃあ、そろそろ行こうか」

幸太郎は少し緊張気味に隣にいる女性に声をかける

彼は生まれた初めて『デート』と呼ばれる行為をするのだから無理はない・・・

しかも、その相手はかなりの美人

事の発端は数時間前・・・

「事件です！事件です！」

ハ神はやて・・・部隊長で超忙しいはずなのに、常に明るい彼女がいつもの調子で叫ぶ

部隊長室に集められたのは3人

幸太郎、フェイト、なのはだ

「はやて・・・今度はどうしたんだよ？」

幸太郎が鬱陶しそうに咳く

彼は、一度彼女の思いつきで「当地ヒーローをさせられたのだから無理もない

「事件つて……ロストロギア絡みの？」

対して、フロイトは少しマジメな表情ではやてに問う

「こや、今日はロストロギアは無しや……。」

はやての表情はいつもに比べて少し変だ……。

強いて言つなら、なにかを惜しむような……。

それでいて、若干、笑いを堪えるような

「今日は……」の近くでカップルがよく襲われる事件が起きたるのは知つとる?」

「あ、私は聞いた事あるよ。確かに……20代前後のカップルがよく襲われるとか」

なのはが何かを思い出したように呟つ

それに、はやては少し頷いて答える

「せや……ほんまならウチらの管轄外やんけどな……今回はちょっと事情が変わつとつてな」

はやては、一呼吸おいて続ける

「今回の事は、イマジンの犯行って事が分かつたんや」

なんでも、現行犯を捕らえようとした管理団員が『ヤギみたいな化物』に襲われたらしい

そこまでは、理解していた・・・

「というわけで、幸太郎君、髪を金髪にして、フェイントちやんとハートしてきてな」

幸太郎には、その一言が理解できなかつた

「本当に金髪に染められちゃつたし・・・」

幸太郎が嘆くように自分の金色に染まつた髪を見る

「仕方ないよ・・・だつて今回の事件は金髪の男女がよく狙われるからしこんだから・・・」

フェイトも、仕事と割り切つていながらも、少し申し分けなさそうだった

結果として、親友の意中の人とデートをすることになってしまったのだから

数メートル後ろ

「これは仕事、これは仕事、これは仕事・・・」

なのはが呪詛の言葉をぶつぶつと呴いていた

幸太郎にも、フェイトにも、まして、はやてにも非が無い事は分かっている

それでも、胸のうちに何かモヤモヤしたものが生まれる彼女だった自分の今回の仕事は、完全無防備の2人にイマジンが近づいて来た場合の援護射撃だ

手元が狂つて、幸太郎ごと逝くかもしれないが、彼の事だ、大丈夫

「デートって……何をすればいいんだらう……？」

普段から忙しいフェイト

なのは、フェイト、はやて

普段から仕事中毒のこの3人のうち

2人も休む（表向きは）ことなどめったに無いので、六課も少し大変な事になっているほどだ

それほどに遊ぶ事の少ないフェイトとしてはデートとは何をすればいいのか分からなかつた

「幸太郎はデートしたことつてあるの？」

何気なくした質問だつたが、答えは予想外のものだつた

「あるけど?むしろ、フェイトってデートしたこと無いの…?」

「…………え？…………ちょっと…………もう一回いいかな？」

「いや、だから『デートくらいならした』ことあるけど……」

「氣まずい空気が二人の間に流れた……」

フェイトは、今だけは隣にいるのがなのはでなく、自分でよかつた
と思つたとか

幸太郎に恋人は現在いません

彼の中では、女友達数人と男友達数人のお出かけ＝デート です

数メートル後ろ

「…………2人とも、なにを話してるのでかな…………？」

正直、2人が何を話しているのかすゞく氣になる……

出来もしない読唇術を使ってみる事にします

「コ、ウ、タ、ロ、ウ、ハ、デ、ヽ、ト、タ、ノ、シ、イ？」
幸太郎はデート楽しい？

「オ、ン、ド、ウ、ル、ラ、ギ、ツ、タ、ン、デ、イ、ス、カ！？」
本当に裏切ったんですか！？

・・・あれ？間違えた？

と、思つたら・・・コンドは一人とも何か氣まずそうだし・・・

ううへへへ！・・・氣になる！・！

「とつあえず、」のあたりを適当に回ってみるか？」

「うそ。やっぱり、それが無難じやないかな」

2人はまた歩き出す

その姿を遠目に見ている異形の存在に氣付かず・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8707o/>

仮面ライダーNEW電王×リリカルなのは Strikers + strikeform
2011年3月23日19時11分発行